

福音メッセージ集

私たちは キリストに会った

重田定義



私たちは キリストに会った

重田定義

目 次

目 次

一	人として貧しくなられた主イエスの招き	1
二	愛すること	17
三	イエス様とはどんな素晴らしいお方か	34
四	「空の鳥、野の百合を見なさい」	56
五	「私たちはキリストに会った」	70
六	主が悔い改めを急がれる理由	86
七	人間の究極的な行き先	104
八	「私にあるものを上げよう」	123
九	キリストはなぜ昇天されたか	140
十	「それがあなたと何のかかわりがありますか」	158

あとがき

一 人として貧しくなられた主イエスの招き

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

(マタイの福音書11章28節)

今日はこの有名なことばについて、御霊の導きをいただきながら、イエス様の深いみこころをがいっしょに考えてみたいと思います。

疲れた人、重荷を負っている人「すべて」を招く

まずイエス様が、疲れた人、重荷を負っている人、すべてを招くとおっしゃっていることに注目したいと思います。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人」の「すべて」とは文字どおり「すべて」であり、ここには何の条件をも設けない、何の選択もしない、何の差別もしない、何の選り好みもしない、という意味が含まれているのではないのでしょうか。これは驚くべきことです。

私たちが何かの救助活動をするとき、そこには必ずなんらかの条件や選択基準を設けます。たとえば、難破して沈みかけた船から乗客や船員が救命ボートに乗り移るときにはどうでしょうか。乗り移る順番や人数を決めるのに選択はなされないでしょうか。そういう場合には女性、子供、病弱者、老人を優先するという選択がなされるのではないのでしょうか。また大災害が発生し多くの負傷者が出た場合、救出や手当てに優先順序はないのでしょうか。ここにも選択が行なわれています。すなわち、救出しやすい人、重傷者を優先するのが常識です。病院の集中治療室（ICU）の利用についても選択基準が設けられていることをご存じでしょうか。まだ日本では行なわれていませんが、集中治療室の利用者が供

給を上回っている米国では、ICUを効率的に活用するため、入室者の選択基準を、回復する可能性のより高い人、高齢者より若年者、社会貢献度のより高い人というように設定しています。

しかし、イエス様はお招きになる対象者に何の条件も選択基準も設けられません。救いの対象がだれであろうと、人種、国籍、年齢、身分や階級、貧富などを問わず、またたとえご自分に敵対する者、ご自分をあざける者であろうと、ただその人が苦しみ悩む人であることにのみ愛のまなざしを注いで、声をかけられるのです。むしろイエス様は疲れていながら、重荷を負っていないが、ご自分の招きの声を聞くことができなかった人がいるのではないかを氣遣っておられます。ここに私たち人間の愛とはまったく異なる、驚くべきイエス様の愛を見るのです。

わたしのところに来なさい

イエス様は「わたしのところに来なさい。」とおっしゃっています。このみことばには、「わたしのものとどまりなさい。わたしが休息そのものですから。」という意味が言外に含まれていると思います。「来るだけでなく、とどまりなさい。わたしにとどまること

が休息です。」イエス様はこうおっしゃっているのではないのでしょうか。これもまた驚くべきことであります。

普通の人であれば、「自分の所に来れば、疲れを回復させるよい方法を教えましょう。」とか、「重荷を下ろして休むことのできる静かな場所がどこかを教えてあげましょう。」という助言を与えるに止まるでしょう。しかし、イエス様の招きはこれとまったく違います。もしイエス様の招きに応えて、疲れ果て、重荷を負うすべての人がみもとに来るならば、イエス様はこれらすべての人をひとり残らず御腕ほうようの中に抱擁し、「わたしのもとにとどまりなさい、わたしのもとにとどまることが休息なのだから。」とおっしゃるのです。病人が、いくら医者にも自分のもとに昼も夜も付きっきりでいてもらいたいと望んでも、多くの病人を診療しなければならぬ医者には、ひとりの患者のもとに一日中とどまって治療を続けることはできません。そうすれば他の患者たちをなおざりにせざるを得ないからです。ここに人間の限界があります。しかし、イエス様はご自分の所に来たすべての人々、ひとりひとりのもとに、昼も夜もご自身が休息そのものとしてとどまってくださるのです。これは驚くべきことではないでしょうか。

招きたもう方

「疲れた人、重荷を負っている人はすべて、わたしのところへ来なさい。」と招いてくださる方は、言うまでもなくイエス・キリストです。しかし、その方が神様の栄光の御座から降りて、人として貧しくなってくださったイエス・キリストであることを私たちはただだけではつきり意識しているでしょうか。光り輝くイエス様が栄光の中からおっしゃったのではなく、貧しく、見映えのしない人としておっしゃったということに私たちはどれほど気づいているでしょうか。

もし、イエス様が「わたしのところに来なさい。」というみことばを栄光の中に座したもう神様としておっしゃったならば、人々がその栄光のふところめがけてまっしぐらに飛び込んで行くのは、たいへんに容易なことでありましょう。また聖書に、

イエスは、ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。

と記されているように、山の上でペテロたちが見た、神々しい、光り輝く御姿のイエス様が「わたしのところに来なさい。休ませてあげよう。」とおっしゃったならば、そのときは、すべての人々が先を争ってみもとに殺到したとしても不思議ではないでしょう。なぜなら、こうして殺到する人々はイエス様がどなたかということをも自分の肉の目で見たからです。

しかし、現実には「わたしのところに来なさい。」というみことを告げられたのは、光り輝く姿の神様ではなく、また王冠をかぶり、宝石をちりばめた衣装をまとい、多くの従者を従えた身分の高い人ではなく、貧しく、見映えのない人の姿のイエス様なのであります。処女マリヤより生れ、大工をその父とし、貧しい家庭に育った身分の低い人物のイエスであります。このことは、イエス様がご自分の郷里で人々に神の国を説かれたときの人々の反応によっても理解できます。これについて、聖書に次のように記されています。

それから、ご自分の郷里に行つて、会堂で人々を教え始められた。すると、彼らは驚いて言った。「この人は、こんな知恵と不思議な力をどこで得たのでしょうか。」

この人は大工の息子ではありませんか。彼の母親はマリヤで、彼の兄弟は、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではありませんか。妹たちもみな私たちといっしょにいるで

はありませんか。とすると、いったいこの人は、これらのものをどこから得たのでしょうか。」

(マタイの福音書13章54～56節)

しかし、預言者イザヤはイエス様について次のように預言していました。

私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現われたのか。彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。

(イザヤ書53章1～3節)

この預言の通り、このような見映えのしない、貧しい姿のイエス様が、人々に「わたしのところに来なさい。休ませてあげます。」とおっしゃったのです。

私たちはすでにイエス様について聖書から多くの知識を得ており、また数々のヨーロッパの宗教画を通して、救い主キリストとしてのイエス様のイメージが頭の中に出来上がっています。しかし、もし私たちがイエス様と同時代に生きていたとすればどうでしょうか。

街角に立った見映えのしない、貧しい姿の人間が、漁師や取税人であった十二人の弟子を伴い、らい病人や障害者や世の中から敬遠されているような人々に取り囲まれながら、「わたしのところ来なさい。休ませてあげよう。」と招かれたら、私たちは彼の所に行くでしょうか。イエス様を見て嘲あざわつた当時の人々と同じように、私たちも嘲笑あざわつて通り過ぎたのではないだろうか。イエス様は、

狐には穴があり、空の鳥には巢があるが、人の子には枕する所ありません。

(マタイの福音書 8 章 20 節)

とおっしゃいました。頭に枕する所もお持ちにならなかったイエス様、ご自身すら休む所もおありでなかったその方が、「疲れた人、重荷を負っている人はすべて、わたしのところに来なさい。休ませてあげます。」とおっしゃったことは、人間的に考えれば最も不可解な矛盾でありましょう。しかし、イエス様は最も不幸な人間と文字どおり一つの立場に身を置くために、

人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためである……。

(マタイの福音書 20 章 28 節)

とおっしゃったように、私たちに對する深いあわれみと愛によって、私たちに仕える者の姿として身分の低い、貧しい、見映えのしない人となってくださったのです。

イエス様の提供される休息とは

ではこのように招いてくださるイエス様の所に行き、そこにとどまることによって、イエス様はどのような休息を私たちに提供してくださるのでしょうか。

イエス様が「疲れた人、重荷を負っている人」とおっしゃっている疲れ、重荷とは何でしょうか。私たちは、疲れや重荷といえば肉体的、精神的なもので、それならばイエス様の所に行かなくても人間的な方法で解決できると考えます。また生きて行くための疲れや重荷は私たちの人生から生じる当然のものであると理解しようとしています。しかし更に遡って、それらは神様を認めずに自分の知恵や力で頑張って生きようとした結果として生じる靈的な疲れ、靈的な罪の重荷によるものであると、なかなか気づくことができないのが私たちではないでしょうか。

私たち人間が、私たちをご自分に似るものに創造されるほど愛してくださる神様、私たちをご自分の子どものように愛してくださる神様に逆らい、神様に従うのではなく、自分

の欲望、自分の考えを中心に生きることが罪なのであります。そして、そのように神様に逆らい自分勝手に生きることが、神様から人間ひとりひとりに吹き入れられた良心、すなわち霊にとっては霊的な疲れ、霊的な重荷となつてのしかかつて来ているのに人間は気づいていません。

ですから、もし私たちが疲れを、重荷を、根源的に取り除こうと思えば、その根源であるところのこの罪を取り除かなければならないのです。イエス様はただ人間的な意味での慰めを提供なさるために、「わたしのところに来なさい。」とおっしゃっているのではありません。イエス様は、私たちの疲れ、重荷の根源となつて罪を私たちに代わって負ってくださるために、そのために私たちと同じように、貧しく、さげすまれた者の姿をとつて来てくださいました。そして私たちの重荷となっている罪を取り除くために、卑しい者の姿のままで十字架の上で私たちに代わって死んでくださったのです。これについてパウロは次のように言っています。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にま

で従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

(ピリピ人への手紙2章6～8節)

またイザヤ書では、神様は私たちのために遣わされた御子イエス様について次のように仰せになっています。

見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。彼は叫ばず、声をあげず、ちまたにその声を聞かせない。彼はいたんだ葦を折ることもなく、くさぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。

(イザヤ書42章1～3節)

イエス様は招きに応じてご自分の所に來た、罪の重荷を負い、疲れ果てたひとりひとりに対して、「いたんだ葦を折ることもなく、くさぶる燈心を消すこともなく、」というような優しい思いやりのみこころをもって、^{ほうよう}抱擁してくださるのです。

貧しい姿のイエス様の招きに答えてイエス様のもとに行くためには

しかし、私たちが、貧しい姿で巷に立って「わたしのところに來なさい。」と招いてく

ださっているイエス様の所に行くことは、人間的な常識ではできないことです。私たちがこの招きに答えてイエス様の所に行くためには、自我が砕かれ、自分の知恵、自分の力、自分の考えがいかに頼りにならないものか、当てにならないものかを徹底的に思い知ることが必要なのです。私たちが疲れ果て、自分の重荷に押し潰されて絶望したそのときに、私たちははじめて自分の堅い自我の殻が砕かれ、御霊によって開かれた霊で、肉の目にはみすばらしく、貧しく見えるイエス様の中に神様を見るのです。そして御前にひれ伏して、自分を休ませるために招いてくださったイエス様を救い主として拝し、イエス様のおっしゃったことを真理のことばとして心に信じ受け入れることができるのです。聖書に、

ん。

と記されている通りであります。

(コリント人への手紙第一12章3節)

狭き門より入れ

疲れた者、重荷を負っている者が、根本的に疲れをいやされ、重荷を下ろすには、この

ように人間の肉の目でいかにも威厳があり、神々しく見える救い主の所に行くのではなく、肉の目には貧しく、みすばらしく見えるイエス様を、霊の目では救い主と確信して、みもとに行くことによって達成されます。

しかし、イエス様の招きを受け入れるには、まず自分の人間的な価値判断がいかに頼りにならないものかということをし、どうしても知る必要があります。イエス様が、

狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいつて行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。

(マタイの福音書7章13〜14節)

とおっしゃっているのはその意味であります。

神のあわれみの具体的な現われ

神様のお考えになるあわれみとは何でしょうか。また神様のご覧になる人間の不幸とは何でしょうか。それは人間の考えるものとはまったく異なるものであります。神様は、目の前の現象としての私たちの一つ一つの不幸に目を留められてそれを解決なさるよりも、

人間の不幸の源泉であり、人間の命取りであるところの罪を取り除くことによって、根本的な解決を計ろうとお考えになったのです。そしてその具体的な答えが、

彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見
ばえもない。

(イザヤ書53章2節)

という姿でこの世に来てくださったイエス様なのであります。

疲れた人、重荷を負っている人の多くはイエス様の招きに従いません。またイエス様の招きに感動して招きには応じるけれども、この方のもとでは自分の期待していたような恵み、すなわちこの世的な、ご利益的な救いは得られないことを知って去る人々も多くいます。

招いてくださる方が、「わたしはあらゆる病気を治してあげる。」と言って人を呼んでおいて、後から「わたしには、たった一つの病気である罪しか眼中にない。わたしが疲れている人、重荷を負うすべての人に与える救いは、罪に対する、また罪からの救いである。」と言えは確かにつまずく人々もあるでしょう。

しかし、あらゆる病気、苦しみ、不幸は、まことの神様の救いに気づかず、に苦しみもが

いている人に、神様に助けを求めるようにと与えられた神様からの示唆^{しき}であり、これはすなわち恵みなのです。なぜなら、人は何不自由なく、することなすことがすべて思い通りに行っているときには、決して神様の救いを求めようとはしません。そのような人は「自分にとって神様は必要ない、自分はこのように自分の力で立派にやっているではないか。」と自分の中にある罪に気づかず、あるいは気づいていても目をつぶって、恐ろしい永遠の滅びに向かって、まっしぐらに突き進んで行ってしまうのです。

神様の愛は、そのようなことを黙ってご覧になっているような冷たいものではありません。何とかしてひとりでも多くの人を罪から救い出し、永遠のいのちを与えようと、苦しみや重荷を与え、それを通して自分の無力さを知った人々をイエス様によってご自分のもとに導いてくださるのです。ですから、

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。

(詩篇50篇15節)

と神様としての権威と愛をもって呼びかけ、苦しみから、重荷からの救いを約束してくださっているのです。このように、重荷に疲れ果て、神様を求める思いを与えられてみると

に行つた者に、神様はこの約束通りイエス様によってすべての重荷の原因である罪を取り除いて、ほんとうの休息を与えてくださるのです。イエス様の提供してくださる休息とは、そのような深いものなのです。そして、一度イエス様のもとに行き、イエス様を心から信頼し、まことの休息を味わつた者は、もうこの世のものによって与えられる休息や安心はまったくの一時的なものであり、心の奥深くまで満たして安らがせるようなものではないことをはっきりと知ようになります。そのようなすばらしいイエス様のもとに安らいにとどまり続けることこそ、私たちにとってほんとうの幸せなのではないでしょうか。

最後に聖歌の二百二十二番の一節をお読みして終わりたいと思います。

「疲れし者よ、来て休め。」と、

やさしくイエスは招かせたもう。

いま汝が身を重荷のあらば、あるままにて、

罪の都を振り返らず、イエスのみもとに、

とく、とく、来ずや今。

二 愛すること、赦すこと

二 愛すること、赦すこと

お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。

(エペソ人への手紙4章32節〜5章2節)

今日も、しばらくの時間、ごいっしょに、みことばを味わいたいと思います。冒頭の聖書の箇所は、パウロがエペソのキリスト者に当てた手紙の一部ですが、ここに人を愛する、人を赦すという言葉が出ています。そこで今日は、この「人を愛すること、赦すこと」について考えてみたいと思います。

Y先生の座右銘「愛」「信」「恕」

私の手元に五年前に亡くなったY先生からいただいた茶飲み茶碗があります。その茶碗の外側には「愛」「信」「恕」の三つの文字が書いてあります。「恕」という言葉は日常あまり使われませんが、人を思いやって許すという意味です。そして、この茶碗に添えられた書面から、この三つの文字がY先生の人生の座右の銘であることがわかりました。Y先生はかつて大阪大学の総長をされたこともある世界的に著名な細菌学者であり、また多くの優秀な研究者を育てた優れた教育者でもありました。このY先生が、愛、信、恕を座右の銘とされた理由について、先生ご自身の説明を以下に要約してみたいと思います。

「人生において人間関係ほど大切なものはない。しかし、人間関係が大切なことはわかっても、それをいかにして築き上げ、どのように維持し続けるかということは難しい。私はこのために次の三つのことを提唱したい。まず「愛」である。それは人間として生きて行くうえで最も大切なことであろうが、また、容易なものでもない。医師が多数の患者に接するとき、教授がその教え子に接するとき、そのひとりひとりに心底からの愛情を持っていると言えばうそになる。しかし、愛のない医師と患者との間、教授と学生との間にはま

二 愛すること、赦すること

この意味の人間関係は成立せず、医師となり、教授となった甲斐はなくなるだろう。ところで真の愛情ということを突き詰めて行くと、その背景に「信」がなくてはならぬことに気づく。砂漠の太陽にも似た灼熱の恋も、色褪せてみれば動物的感情のみが残っていたということは、「愛」に「信」が伴わなかった場合であろう。信じてこそ、人間関係は永續する。だが、信じるということも、言うことは易しいが実行は難しい。人の世において、人間が人間を信じることの難しさは、時代とともに増大している。だが愛することのためには信がなくてはならないし、信がなくては続かない。それでも人間関係の長い経過の中では、人は信と不信との明暗の境を歩むことが多い。個人の判断の仕方は個々別々であることは当然で、しばしばこれを不信と結びつけるという過ちを犯す。このような人間関係の中で、人が人を信じるためには、恕^{ゆる}す心がなくてはかなわない。信じるためには恕^{ゆる}すのである。しかし、恕^{ゆる}すことも難しい。人によっては最も難しいと言いかもしれない。それができれば、何もかも問題ではないと言われるかもしれない。考え方によっては、最も難しい恕^{ゆる}すということが可能にするのは、最初に戻って愛である。愛するということがはじめにあれば、人を恕^{ゆる}すことができるだろう。師弟の間、友人の間、家族の間に不信が突風のように襲うことがある。このとき、恕^{ゆる}すことができるのは、おおらかな愛があるからだ。

人と人との変わらぬ人間関係を生涯にわたって維持するためには、愛することから初め、愛するために信じ、信じることにするために恕し、恕すことのために愛することである。「愛」「信」「恕」は、人間関係のために作った自作の座右の銘である。」

人間には「愛」「信」「恕」の連鎖を断ち切ることはできない

これを読まれた方はどなたも、Y先生がまことに誠実な、真摯な人柄の方であることがおわかりであろうと思います。けれども、この文章をお読みになって気づかれた方も多いと思いますが、この「愛」と「信」と「恕」の相互の関係は、私たち人間が不完全であるために、それぞれが鎖の輪として連鎖状態になって限りなく堂々巡りをしてしまうものなのです。Y先生がいっしょうけんめいにお考えになった人間に最も大切な、人を愛すること、信じること、恕すことは、この鎖が断ち切られない限り、永遠に不可能ということになるのです。

「愛」「信」「恕」には自己犠牲が伴う

では、いったいなぜ人間には人を愛するために信じることが、信じるために恕すことが、

二 愛すること、赦すこと

恕^{ゆる}すために愛することができないのでしょうか。それはこの三つにはそれぞれ大きな自己犠牲が必要です。人間はだれでも多少の自己犠牲、多少の痛みなら耐えられますが、大きな自己犠牲は本能的に嫌がり、それを避けようとします。聖書に、ペテロがイエス様に兄弟を赦すことについて質問をしているところがあります。

そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯したばあい、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」

(マタイの福音書18章21〜22節)

恐らくペテロとしてはイエス様に褒められようとして、精一杯自己犠牲を払ったつもりでこう言ったのでしょうが、それに対してイエス様はそれでは足りずに七度の七十倍赦しなさいとお答えになりました。これはペテロにとっては恐らく絶望的な要求とも思えたことでしょう。なぜならそんなことはとうてい実行不可能だからです。そのような犠牲はペテロに限らず私たち人間はだれも払うことはできないように思われます。しかし、イエス様は人をほんとうに赦すというのは、そのようにしてはじめて言えるのだということを、ここでおっしゃっているのであります。

イエス様はまたある金持ちの青年と次のような問答をなさっています。

ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生、永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちにはいりたいと思うなら、戒めを守りなさい。」彼は「どの戒めですか。」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」イエスは、彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。

(マタイの福音書19章16〜22節)

この青年はイエス様に「永遠のいのちを得るためにどんな良いことをしたらよいでしょ

二 愛すること、赦すこと

うか。」と言う質問をしました。それに対してイエス様は「それなら神様の律法を守りなさい。」と言われました。その律法の中には「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」という戒めもありました。ところが彼はイエス様に「そのようなものはみな守っています。何がまだ欠けているのですか。」と反論したのです。恐らく彼は彼なりに律法を守っていたと思います。しかし、それはそれほどの痛みを伴わない程度に自己犠牲を払って守っていたのです。イエス様はちゃんとそのことをご存じでした。イエス様がこの青年に言われた言葉はたいへん厳しいものでした。「あなたがもし、ほんとうに隣人を自分自身のように愛せよという戒めを守っていると云うなら、自分の持ち物を売り払って貧しい人に与えなさい。そうすれば永遠のいのちを得ることができます。」ところが青年はそのような大きな犠牲を払ってまでも隣人を愛することはできないと知って、悲しんで去って行ったのです。しかし、これはこの青年に限ったことではありません。私たちもイエス様からそのように言われれば、彼と同じように「できません」と言わざるを得ないのではないのでしょうか。

「愛」「信」「恕」は人間に原罪があるゆえに実行不可能

人間というのは、だれでも自分がかわいい、自分がいちばん大事という性質があります。そして、聖書で罪というのは、このように、自分が、自分が、というようにいつも自分を中心に置き、自分の思いを満たすことであります。私たちはこのように自己中心である限り、聖書でいう罪人である限り、ほんとうに人を愛すること、ほんとうに人を信じること、ほんとうに人を恕することはできないのです。ですから、Y先生の座右の銘である「愛」「信」「恕」の三つを結ぶ鎖は私たちの力では断ち切ることができないばかりか、私たちはその逆のこと、すなわち意図的でないにしても、往々にして人を傷つけたり、裏切ったり、非難中傷したりしてしまう自分に気づかされるのではないのでしょうか。それが生まれながらの人間の姿なのであります。ローマ人への手紙の三章にはこのような人間の罪の状態が書かれています。

では、どうなのでしょう。私たちは他の者にまさっているのでしょうか。決してそうではありません。私たちは前に、ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです。それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はい

二 愛すること、赦すこと

ない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。」「彼らののは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。」「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、」「彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」「彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲惨がある。また、彼らは平和の道を知らない。」「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」

(ローマ人への手紙3章9～18節)

私たち人間はすべてこのような状態にあるとパウロは言っていますが、それはアダムの子孫として私たち人間が生まれつき持っている罪の性質のためであります。パウロはまた次のようにも言っています。

そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。

(ローマ人への手紙5章12節)

すなわち、最初の人アダムを神様がお造りになったときは、完全な、罪のない人として

造られ、神様に似たものとして造られた人間は神様と同様に死ぬことのないものでありましたが、そのアダムが神様に對する罪を犯したことによって、アダムの子孫である私たちは生来罪人として生まれ、神様から有罪の宣告を受けるものとなったのです。すべての人に死が臨むという事実は、すべての人が神様に對する罪があることを示しているのです。罪という遺伝子がすでに組み込まれてしまっているのです。そのために私たちはどんなに努力しても、自分をまったく無にして人を愛することはできないのです。

神の愛、イエス・キリストの愛

では、自分を無にする愛はあり得ないのでしょうか。あるのです。ただしこれは人の愛ではなく、神様の愛であり、その神様のみところに従って私たち人間のために死んでくださった神の御子イエス・キリストの愛であります。

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

二 愛すること、赦すこと

(ヨハネの手紙第一 4章9〜10節)
キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによつて私たちに愛がわかったのです。

まことの愛とは、ご自分に背いている人間の罪を赦すために、ご自分の御子を罪の身代わりとして十字架の上で罰するという、神様のご自分を無にされた大きな犠牲の上に立った愛であり、またこの父なる神様のみにこころに従って私たち罪人のためにご自分のいのちを捨ててくださった御子イエス・キリストの愛であります。

神の愛を持つためには

さきほど申しましたように、私たち人間が自分の努力で、自分の意志で、「愛」「信」「恕」^{じよ}を結ぶ鎖を断ち切ることは不可能ですが、そのような私たちも、ただ一つの条件のもとでのみ、この鎖を断ち切ることができ、人を愛し、信じ、赦すことができるようになります。その条件とは、まず私たちがこの神様の愛そのものの神の御子イエス様を信じ、受け入れることあります。聖書は次のように言っています。

だれでも、イエスを神の御子と告白するなら、神はその人のうちにおられ、その人も神のうちにいます。私たちは、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。このことによって、愛が私たちにおいても完全なものとなりました。

(ヨハネの手紙第一 4章15〜17節)

「イエスを神の御子と告白する。」とは、私たちがイエス様こそ自分の罪を身代わりに負って死んでくださった救い主と心から信じてそれを口で告白することであり、そのようにして信じたとき、その瞬間に私たちの罪の汚れはイエス・キリストの流された血潮によって聖められ、私たちの中に神様の愛が人となったイエス・キリストが入ってくださり、私たちのかたくなで石のような自己中心の心を取り除いて、人を愛することができるようになります。神様はこれについて次のように約束しておられます。

わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。

二 愛すること、赦すこと

(エゼキエル書36章25～26節)

私たちはどんなに頑張っても不完全な愛、自己中心的な愛しか持つことはできませんが、もしイエス様を信じれば、信じた人の中に住んでくださるイエス様によって、愛が私たちにおいても完全なものとなりますのであります。

イエス様は愛を説かれました。しかし、私たちがいくらイエス・キリストの愛の教えをすばらしいと感じても、それで私たちの中に完全な愛は宿るでしょうか。決して宿りません。キリスト・イエスの愛の教えによってではなく、イエス様を信じ受け入れたときに、宿ってくださるイエス様ご自身によって愛が完全なものになるのです。イエス様を信じるとはそういうことなのであります。キリスト教を信じるというのは、言いかえればイエス・キリストの教えを信じることでありますが、イエス・キリストの教えを信じてても完全な愛は私たちのものにはなりません。私たちの罪を贖なってくださったイエス様ご自身を信じることによって、はじめてイエス様の愛が私たちの中に注がれるのです。

自分が人を愛するのではなく、内住の主イエスが人を愛される

しかし、イエス様を信じたらそれだけでほんとうに人を自分自身のように愛することができるのだろうか、という疑問を持たれる方もおられるのではないでしょうか。その疑問は当然です。ただイエス様を信じただけではできません。私もできません。なぜできないのでしょうか。それはなお自分の意志で愛そうと思ってしまからです。イエス様を信じた後でも私たちは自分の意志で人を自分自身のように愛することは決してできないことを心に銘じていなければなりません。それはなぜでしょうか。イエス様を信じた瞬間に、私たちの霊は新しく生まれ代わり、神様に聞き従うことを喜びとするようになります。ところがこの新生した霊を着ているからだのほうは、この世に置かれている間はなお肉の性質を持ち続けており、そのためにこの肉の性質がイエス様に従いたいと思う霊の働きを妨げるのです。パウロはこれについて次のように自分の霊と肉の状態を分析しています。

私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。そういうわけで、私は、

二 愛すること、赦すこと

善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に對して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。

(ローマ人への手紙7章19〜23節)

このように、私たちの内なる人である新生した霊は、自分自身のように人を愛したいと願いますが、私たちの外なる人である肉は、それを拒むのです。真剣にイエス様に従いたいと思うキリスト者はみな、この矛盾に悩みます。そこで、はっきりと知っておかなければならないのは、イエス様を信じる私たちのからだは、単にイエス様という宝を入れている土の器に過ぎないということです。また、イエス様を信じた私たちはしばしば、人を自分自身のように愛することができないのは、まだ自分の中にイエス様が宿ってくださっていないのではないかという疑いを起こしがちですが、それはこのように、内なる人と外なる人との葛藤かつとうによるものであり、私たちがどう思おうと、それには関係なくイエス様はみことばの約束によって、信じる者の中に住んでおられるのであります。イエス様は次のように約束しておられます。

だれでもわたしを愛する人は、わたしのことを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。

(ヨハネの福音書14章23節)

では、どうしたら人を自分自身のように愛することができるのでしょうか。それは自分の意志で愛するのではなく、自分が単なる主の器であることをはっきりと意識して、私たちの中に宿っておられるイエス様におゆだねし、イエス様の愛が自分という器を通してその人に伝わるようにと祈ることであります。そうしたときに、イエス様は宿っている者を器として、管として用いてくださり、ご自分の愛をその人に注いでくださるのであります。このように自分を明け渡してイエス様にお願ひすることが、自分の外なる人である肉の思いを消すための唯一の方法ではないでしょうか。パウロはこれについて次のように言っています。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によって

二 愛すること、赦すこと

いるのです。

(ガラテヤ人への手紙2章20節)

「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられる。」というこのみことばがほんとうに自分のものとなったときに、私たちは「愛」と「信」と「恕」の連鎖を断ち切ることができ、神様が神の御子イエス様によって、みもとに行った私たちを愛し、赦してくださいましたように、私たちもそのイエス様の愛によって人を愛し、イエス様がその人をも救いの対象にしておられるがゆえに信じ、イエス様がその人のためにも死なれたほど大切な人であるがゆえに赦すことができるようになるのではないでしょうか。

三 イエス様とはどんなにすばらしいお方か

今日はイエス様のご降誕をお祝いするクリスマスの日にあたりますので、イエス様とはどんなにすばらしいお方か、私たちのために何をしてくださったか、ということについて、聖書のあちこちからみことばを引用しながら、ここで改めてごいっしょに考えてみたいと思います。

世間ではクリスマスという言葉からイエス様を思い浮かべる方は多くありません。この世の方々はずサンタクロースを思い浮かべます。ですから、そういう方々のクリスマスと、私たちイエス様を信じる者がお祝いするクリスマスとは質的にぜんぜん違うのですけれども、それでは、いわゆる教会のクリスチャンの方々がどれくらいイエス様のことをわかっておられるかと言いますと、「私は神様は信じていますが、イエス様の十字架はわからない……。」とおっしゃる方が少なくないのです。それはイエス様をよくご存じないか

三 イエス様とはどんなにすばらしいお方か

らず。

クリスチャンとはキリスト者、すなわちキリストのもの

私はお祈りのとき、「神様」とお呼びするより「イエス様」とお呼びして祈ります。なぜなら、私自身のためにいのちを捨ててください、永遠の滅びに至る恐ろしい罪から救い出してくださいしたのは神様の御子であるイエス様ご自身だからです。そしてその事実を心から信じた者がクリスチャン、すなわちキリストのものなのです。ですから、ただ単にその方のお名前を知っているということではなく、その救い主であるイエス様と人格的な交わりを持つときにこそ、私たちにまことの喜びと平安と希望が与えられるのです。そして、そのような喜びと平安と希望を体験した者には、イエス様についてもっと知りたい、より良く知りたいという思いが湧いてまいります。

イエス・キリストとはどんなお方か、その七つの特性

そこで今日は、イエス様のお持ちになっている七つの特性を聖書のみことばを引いて考えながら、より良くイエス様を知ることができればほんとうに幸いなことと思います。

イエス・キリストとはどんなお方か その一

イエス様の第一の特性は、「神のことばでありながら血と肉を持たれた。」ということである。神のことば、これは神に属するものであり、血と肉を持たれた方、これは人に属するものであります。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。

(ヨハネの福音書1章1〜2節)

この「ことば」とは、もちろんイエス様のことですが、言いかえますと、神様のお考え、あるいは神様のご計画そのものであります。私たちも心で思っていることを言葉に出さなければ人にわかってもらえません。つまり、言葉は自分の意思を現わすものです。ですから「神のことば」とは、神様のご意思を現わす方、すなわちイエス様ご自身であります。その神のことばが人となって私たちの間に来てくださったのです。

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満

三 イエス様とはどんなにすばらしいお方か

ちておられた。

(ヨハネの福音書1章14節)

そして、ヨハネの黙示録十九章には次のように書いてあります。

その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。

(ヨハネの黙示録19章13節)

私たちの間に来てくださり、十字架に架かって血を流されたイエス様は、ご自分が流された血に染まった衣を着ておられ、「神のことば」と呼ばれたとあります。

そこで、私たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

(ヘブル人への手紙2章14〜15節)

子たち、すなわち私たち人間は血と肉を持っていますから、「神のことば」であるイエス様もまた私たちと同じように血と肉をお持ちになった、とあります。血と肉を持つということは、限りのあるいのちを持つということです。イエス様がなぜ血と肉をお持ちになっ

たかと言いますと、死ぬためであります。死ぬためには血と肉を持っていなければなりません。神様は永遠なる方であり死ぬことのない方です。その神であるイエス様が、ただ私たちの身代わりとなって死んでくださり、私たちを罪から、そして罪の報いである死から解放してくださるために、血と肉を持って地上に来てくださったのであります。パウロは神様が私たちと同じからだを御子にお与えになられた目的を次のように言っています。

神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。

(ローマ人への手紙8章3節)

イエス・キリストとはどんなお方か その二

イエス様の第二の特性は、「神のひとり子でありながら、人となられた。」ということでもあります。はじめの所と少し似ていますが、神のひとり子、すなわち天上の方が地上の人となられた、ということです。

こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった。ま

三 イエス様とはどんなにすばらしいお方か

た、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」

(マタイの福音書3章16～17節)

イエス様は神様の御子ですから、罪の悔い改めのバプテスマをお受けになる必要はまったくなかったにもかかわらず、私たちと同じ人の子としてバプテスマを受けてくださったのです。そのとき天から神様のみ声が聞こえ、「これはわたしの愛する子」、すなわち神様の御子であるということを、神様ご自身がはっきり私たちに宣言してくださいました。

イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかった。そこで、内密に去らせようと決めた。彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現われて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないうであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださいる方です。」このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就

するためであった。「見よ。処女がみごもっている。そして、男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。）ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。

（マタイの福音書1章18〜25節）

また神様は、はるか前から預言者たちを通して、イエス様を人としてこの世にお遣わしになることを約束してくださっていたのです。その一つに預言者イザヤの次のような預言があります。

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は、「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

（イザヤ書9章6節）

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たち

はいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かつて行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

(イザヤ書53章5〜6節)

この神様のお約束どおり、神の御子は私たち人間の罪を身代わりに担ってくださるために人としておいでになったのです。

イエス・キリストはどんなお方か その三

イエス様の第三の特性とは、「すべての主でありながら人間のしもべとられた。」こととであります。まずイエス様がすべての主である、ということに関するみことを挙げてみたいと思います。

御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。

(コロサイ人への手紙1章15～17節)

神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。

(ピリピ人への手紙2章9～11節)

すべてのものが御子によって造られ、御子のために造られ、御子にあって成り立っているということは、とりもなおさず、神の御子イエス様は人間をも造ってくださったお方であるがゆえに、私たち人間の主であられるということでもあります。また父なる神様ご自身が、イエス様にすべての名にまさる名をお与えになった、とありますが、すべての名にまさる名とは主という名であり、神様がイエス様にこのように高い、主というお名前をお与えになったのは、すべての人がへりくだって、「イエス様は私の主です。」と告白することが神様のみこころであるからです。

そのイエス様がこの世に來られて、次のようにおっしゃっています。

人の子が來たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、

三 イエス様とはどんなにすばらしいお方か

多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためである……。

(マタイの福音書20章28節)

すべての主であるイエス様は「人の子」と、ご自分のことをおっしゃっています。イエス様はこのようにご自分をお呼びになることで、私たちに「わたしは、あなたがた人間と同じになってこの世に来ました。私はあなたがたと同じです。」とおっしゃっているのです。そして、それは仕えられるためではなく仕えるため、すなわち「あなたがたの贖いの代価として自分を与える、そのようにしてあなたがたに仕えるために、わたしは人の子として来たのです。」とおっしゃってくださっているのです。

イエス・キリストとはどんなお方か その四

イエス様の第四の特性は、「正しい方が罪人となられた。」ということでもあります。正しい方、これは完全に正しい方という意味ですから神様の属性であります。その神様の属性を持っておられる完全に正しい方が、人の属性である罪人とされたということでもあります。

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。

ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

（ペテロの手紙第一 2 章 22〜24 節）

「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされなかった。」とありますが、これは人間としては不可能なことです。私たちにとって、生まれてから今まで何の偽りも口にしたことがない、などということはまったく不可能であり、また、あり得ないことです。完全に正しい方であるイエス様であるからこそ、それがおできになったのです。その絶対に正しい方が私たちの醜い罪を身に負われて十字架に架かれ、私たち罪人の身代わりになってくださったのです。そして私たちはそのイエス様の打ち傷のゆえに、罪からいやされたのであります。同じことが別の表現で、次のように書かれています。

キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなつたのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。

三 イエス様とはどんなにすばらしいお方か

イエス様の第五の特性は、「永遠なる方が死を味わわれた。」ということでもあります。神の御子であるイエス様は永遠に死なない方でもあります。その永遠に生きておられる方が、死を味わわれたのであります。死とは罪の報酬であり、単に肉体の死だけを意味するのではなく、神のさばきの結果神に見捨てられて永遠の滅びに入るということを意味しています。イエス様は私たちが神様から見捨てられるべき罪を身代わりに負って、ご自身が神様に見捨てられるという恐ろしい体験を味わわれたのです。このことはイエス様が十字架の上で叫ばれた次のみことばから知ることができます。

さて、十二時になったとき、全地が暗くなって、午後三時まで続いた。そして三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ。」と叫ばれた。それは訳すと「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」という意味である。

イエス・キリストとはどんなお方か その五

(ペテロの手紙第一3章18節)

(マルコの福音書15章33〜34節)

イエス様は「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と十字架の上で叫ばれました。イエス様は完全に父なる神様に見捨てられたのです。神の御子であるイエス様がなぜ神様に見捨てられたのでしょうか。それは罪人として神様に罰せられたからであります。神様に背き、神様を無視して、まったく自分勝手に生きている私たちこそ神様から見捨てられ、この恐怖の叫びをあげなければならない罪人なのであります。それを思うときに、私たちに代わって神様から見捨てられるという恐ろしい目に会われたイエス様にどれほど感謝しても、し尽くせないのではないのでしょうか。

イエス・キリストとはどんなお方か その六

イエス様の第六の特性は、「よみがえられ、天に上げられ、そして今、信じる者の中に住んでおられる。」ということであります。

人間を含めてどんな生物も一度死ねばよみがえることはできません。しかしイエス様は死んで三日後によみがえられました。それはイエス様が神様である証拠であり、また、ご自身の復活を通して、信じる者をもよみがえらせてくださることを示されたのであります。パウロは次のように言っています。

三 イエス様とはどんなにすばらしいお方か

もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もお、自分の罪の中にいるのです。そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いていただけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。

(コリント人への手紙第一15章17〜22節)

イエス様は復活なさってから四十日間、弟子たちなど約五百人の人々にご自分を現わされた後に天に昇られ、父なる神様の右の座に着かれました。しかし、そのイエス様はご自分を信じ愛する人たちの内に、今も住んでくださっています。

だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。

と、イエス様がおっしゃっている通りであります。

また、ヨハネの黙示録三章では、

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

(ヨハネの黙示録3章20節)

と、イエス様はおっしゃっています。このように、イエス様は私たちの心の扉の外に自らお立ちになって、私たちのかたくなな心の扉を叩いてくださっているのです。そして私たちが、イエス様に向かって心の扉を開けばいつでも、イエス様は喜んで私たちの内に入ってください、私たちと親しい交わりをしてくださると、このみことばを通して切なる思いで呼びかけてくださっているのです。

イエス・キリストとはどんなお方か その七

イエス様の第七の特性は、「神の右の座に着かれた方は、ふたたびこの世に来られる。」

ということでもあります。よみがえられたイエス様は、神の栄光の御座に着かれるために天に昇られるときに、ふたたびこの世に來られることを約束してくださいました。このイエス様のご再臨の目的は何なのでしょうか。それは二つあります。

まず最初のご再臨の目的は、信じた人々を迎え、その人々の肉体をよみがえらせるためです。イエス様は天に昇られる前に、弟子たちに次のように約束なさいました。

わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

(ヨハネの福音書14章3節)

パウロはイエス様が迎えに来てくださるとき、まずイエス様を信じて死んだ者が朽ちないからだによみがえり、次にそのときに生きている者のからだも同様に朽ちないからだに変えられて、イエス様とともに天に引き上げられると記しています。

私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び來られるときまで生き残っている私たちが、死んでいいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使のかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って來られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っ

ている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

(テサロニケ人への手紙第一 4章15～17節)

この、信じる人々のご再臨では、イエス様は空中まで私たちを迎えに来てくださるのです。信じてすでに天に召された人たちの霊は死後直ちに天に上げられ、イエス様とともに全き平安のうちにおりますが、墓の中に眠っていたその肉体は、このようにイエス様が迎えに来てくださった瞬間に、イエス様と同じ聖い、朽ちないからだによりがえり、霊肉ともに完全なものとなるのです。そして、そのときまだこの世に生き残っている信者の肉体も、一瞬のうちに朽ちることのないイエス様と同じ聖い肉体に変えられて、一挙に空中まで引き上げられ、イエス様にお会いし、飲むながら主とともに天に携え上げられるのであります。これが、決して変わることのないイエス様のすばらしいお約束であり、信じる人々の最も大きい希望であります。このように、先に召された信者も、まだ地上に置かれている信者も、ともに完全な者として天に迎えてくださるためのイエス様のご再臨を、空中再臨または空中携挙けいぎよと言います。

三 イエス様とはどんなにすばらしいお方か

二度目のご再臨はイエス様の地上への再臨であり、その目的は信じない人々をさばくためのものであります。捕えられたイエス様は大祭司の質問に対して、天に戻って後ふたたび来るということを明言なさっています。

大祭司はイエスに言った。「私は、生ける神によって、あなたに命じます。あなたは神の子キリストなのか、どうか。その答えを言いなさい。」イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりです。なお、あなたがたに言うておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るようになります。」

(マタイの福音書26章63〜64節)

ヨハネはそのときの状況を次のように預言しています。

見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。

(ヨハネの黙示録1章7節)

イエス様は弟子たちに向かってご自分がさばかれるときの様子を次のようにお話になっています。

人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。そうして、王は、その右にいる者たちに言います。「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。」

(マタイの福音書25章31〜34節)

それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。」

(マタイの福音書25章41節)

「のろわれた者」とはイエス様を拒んだ者であります。大祭司をはじめとして、イエス様をさばいた者、十字架につけた者、そしてその当時イエス様を受け入れなかった者だけでなく、今日に至るまでイエス様の福音を拒んだすべての人々をさばくために、このようにイエス様は地上にご再臨になるのであります。

三 イエス様とはどんなにすばらしいお方か

神と人との唯一の仲介者

では、神のことはであり、神の御子であり、すべての主であり、完全に正しい方であり、永遠なる方であり、神の右の座に着かれた方が、どうして血と肉を持った人となり、人間のしもべとなり、罪人として十字架の死を味わわれ、よみがえって天に昇った後も、またふたたびおいでになるのでしょうか。それは私たち人間に対する神の計り知れない大きな愛とあわれみによるのであります。神様は罪人である私たち人間にこう言われます。

わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。

(エゼキエル書33章11節)

そして、罪人との唯一の仲介者として、神様は、神でありながら人となられたイエス様を立てられたのであります。テモテへの手紙第一の二章には次のように書かれております。

神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至ってなされたあかしなのです。

神に逆らい背いた私たち人間が、神の赦しを受け、神と和解させていただくために、そして滅びに至る死をまぬがれて永遠のいのちと天国の国籍を得るためには、この方、すなわち私たちの救い主であるイエス様にすがらはありません。聖書が次のように言っている通りであります。

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

(使徒の働き4章12節)

はじめに申しました通り、まことの神様をまだ信じない方々ばかりではなく、教会に行っている方々の中にも、イエス・キリストがわからない、とおっしゃる方がいます。しかしイエス様がどんな素晴らしいお方か、私たちのために何をしてくださったかを知ることなしには、御子イエス様を信じることも、父なる神様をほんとうの意味で信じることもできないのではないのでしょうか。どうか、おひとりおひとりがご自分にとってイエス様がどんなお方かよくお知りになり、イエス様を心から信じ、信頼していただけますように、心か

三 イエス様とはどんなにすばらしいお方か

ら
お
祈
り
し
て
お
り
ま
す
。

四 「空の鳥、野の百合を見なさい」

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくだらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。

四 「空の鳥、野の百合を見なさい」

(マタイの福音書 6章26〜30節)

今日はこのみことから、空の鳥、野の百合から私たちが何を学ぶべきかをいっしょに考えてみましょう。

まず私たちが注目しなければならないのは、「空の鳥」「野の百合」から学ぶということです。イエス様が「空の鳥」とおっしゃっているのは、人間に飼育され、巣を与えられ、渴かないように、飢えないように十分な水と餌をもらっている鳥ではなく、野生の鳥、野鳥を指しておられるのです。同じように「野の百合」は、人に栽培されて、枯れないように美しい花を咲かせるように水や肥料を与えられ、倒れないように支柱を立ててもらっている百合ではなく、野生の百合のことを言っておられるのであります。イエス様はその彼らから学ぶようにとおっしゃるのです。では私たちは彼らから何を学ぶべきなのでしょうか。

神に対する従順を学ぶ

まず私たちは彼らから神様に対する全き従順を学ぶのであります。では彼らのどこに神様に対する従順を見ることができのでしょうか。それを知るために私たちは謙虚に彼ら

を観察する必要があります。

空の鳥の従順

最近は一オウソッチングという言葉がわが国でも使われるほど、野鳥を観察することが流行の一つとなっています。いろいろな野鳥が、さえずったり、飛んだり、枝に止まったり、巣を作ったり、雛に餌を与えたりしている様子は、ちょっと見るといかにも楽しそうに見えます。しかし、もし一羽の野鳥がどのようにに生れ、育ち、生き、そして死んで行くかを詳しく観察することができれば、鳥にとっては楽しみより、むしろ生きるための厳しい日々の多いことがわかるでしょう。苦勞して作った巣が荒らされ、せっかく生んだ卵や育てた雛が奪われることもあります。また人間をはじめ、他の動物や鳥にいのちすら狙われることもあります。穏やかな日々ばかりが続くことはありません。激しい嵐の日もあり、灼熱の夏もあれば厳寒の冬もあります。干ばつや、それとは反対に洪水で餌が取れない日が続くこともあるでしょう。あるいは心ない人間の手による開発のために生きるのに適した生息地を奪われることもあります。

しかし、どんなにこの世の冷酷さに打たれても、どんなひどい環境に置かれても、野鳥

は自分の不幸や不遇を嘆くことなく、自分の境遇を他の鳥と比較することなく、創造主なる神様に全き従順をもって従い、神様に身をゆだねて黙々とその日その日を生き、神様の定めのときが来れば黙々と死んで行くのです。このような空の鳥を通して、造り主であり、万物の支配者である神様はご自分の栄光を現わされるのです。

野の百合の従順

野の百合の場合はどうでしょうか。私たちはいつもは野の百合を見ても、ただ自然の中で芳香をただよわせ、楚々として咲いている清楚な美しさに感動するだけで終わってしまふのではないのでしょうか。しかし、もっとよく野の百合を観察するならば、彼らからも私たちは神様に対する従順を学ぶことができます。

まず野生の百合はどこに見られるのでしょうか。原野や谷間や岩陰などその場所はいろいろです。その場所が百合の生育に必ずしも適しているとは限りません。日のよく当たるところもあれば、日陰の場所もあります。地味豊かな土地ばかりでなく、痩せた地にも生えています。人目につかない場所にあつて、その存在がまったく知られずに一生を終わる百合もあるでしょう。しかし彼らはもっと条件のよい環境に生えている百合をうらやむこ

となく、どんな場所に置かれてもつぶやくことなく、自分を造ってくださった神様に全き従順によって従い、自分の置かれている場所で、美しさの限りを尽くして咲きます。また日照りで枯れることがあっても、あるいは、ようやく花が開いたときに、風によって折られたり、人の手によって切り取られることがあっても、彼らはその瞬間まで神様に従い、神様にゆだねて精一杯生きます。このような野の百合を通して、造り主であり、万物の支配者である神様は、ご自身の栄光を現わされるのであります。

人間を除く自然はすべて神に従順

このように空の鳥、野の百合を詳しく観察できたときに、私たちは空の鳥、野の百合ばかりでなく、自然界は天体の運行から小さな虫の営みまで、すべてが創造主なる神様に全き従順をもって従っていることを知ることができます。しかし、ここにただ一つだけ例外があります。それは私たち人間です。私たちは自分を、あるいは人間を真剣に吟味したときに、神様に対する全き従順をもって従っている自然とは全然違う生き方をしているということに気づくのではないでしょうか。

私たちは自分の置かれている環境、状況がどんなに厳しくても、それを神様から与えら

れたものとして、空の鳥、野の百合のように従順に受け入れて平安でいられるでしょうか。とてもそのようなことはできません。私たちは自分の暮らしについて、仕事について、健康について、家族や友人について、あるいは社会について絶えず心配し、思い煩います。そして自分の思い通りにならないと苛立ったり、嘆いたり、不平を言ったり、あるいは不満を持ったままあきらめようとしたりするのではないのでしょうか。

人間だけがなぜ思い煩うか

ではなぜ人間だけが思い煩うのでしょうか。それは人間が、人間を含め天地万物をお造りになった神様に背き、限りある人間の力や知恵だけに頼って生きようとするからです。イエス様は冒頭のみことばの中で、

あなたがたのうちだが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。

(マタイの福音書6章27節)

とおっしゃっていますが、神様を見失った人間は、心配しても仕方がないことを知りながらも心配するしかないのです。

イエス様は、そのような人間に対して、

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。

（マタイの福音書 6 章 26 節）

なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきま
えなさい。働きもせず、紡ぎもしません。

（マタイの福音書 6 章 28 節）

きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどまでに装っ
てくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくだらないわけがありませんよ
うか。

（マタイの福音書 6 章 30 節）

とおっしゃっています。

神に似せて造られた人間

私たちはこのみことばによって、人間の思い煩いの原因は、私たちを他の被造物よりすぐれたものとしてお造りくださった神様を見失ったためであることを知ることができます。

創世記には私たち人間を神様がお造りになったときの状況が次のように記されています。

神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造らう。……」と仰せられた。

(創世記1章26節)

神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。

そこで、人は、生きものとなった。

(創世記2章7節)

このように、神様は人間をご自分に似るものとしてたましい、すなわち霊を吹き込んでお造りになりました。その目的は神様が私たち人間との意思疎通をお望みになったからであります。その人がいかに見映えがしなくても、また何の功績がなくても、ただ神様に似るものとして神様と親しく交わることができるように造られているという点において、人

間は空の鳥、野の百合よりもすぐれた装いを与えられています。しかし、悲しいことにこのように造られた人間は、みこころに反して神様から背き離れてしまいました。それは、アダムとエバが神様の言いつけに背いて自分の欲に従い、食べてはならない木の実を食べたことに発しています。

罪によって神を見失った人間

罪によって霊が衰えた結果、神様を見失った人間には、神様を信頼することもできず、まして神様に自分をゆだねることなどできません。ですから明日のことはもちろん、今日の自分の状態についても思い煩うのであります。

このように霊が衰えて神様が見えなくなったあわれな人間に対して、イエス様は神様に全き従順をもって従っている空の鳥、野の百合を見ることを通して、人間は神様に似るものとして神と交わるように造られた神の被造物であること、また人間は自分を創造することもできないければ、自分を維持することもできない被造物であることを自覚して、神様が人間をお造りになった原点に立ち返り、神様に全き信頼をもって従うように、とおっしゃっているのです。

それに反して、人間が神様を忘れ、神様が養ってくださっていることに気づかず、自分の力で自分を養おうとするならば、たちまち日々の生活を含めてあらゆることについて思い煩いや不安が起ります。思い煩いは貧しいから起こるものではありません。富める者にも同じように、いや貧しい者以上に起ります。富と権力を手にしたソロモン王は、伝道者の書の中で次のように言っています。

金銭を愛する者は金銭に満足しない。富を愛する者は収益に満足しない。これもまた、むなしい。財産がふえると、寄食者もふえる。持ち主にとって何の益になろう。彼はそれを目で見るだけだ。働く者は、少し食べても多く食べても、ここちよく眠る。富む者は、満腹しても、安眠をとどめられる。私は日の下に、痛ましいこととがあるのを見た。所有者に守られている富が、その人に害を加えることだ。

(伝道者の書5章10～13節)

人間が思い煩いから根本的に解放されるには

私たち人間が思い煩いから根本的に解放されるにはどうしたらよいでしょうか。それは神様に立ち返ることです。そして、そのためには神様に背いた罪を取り除く必要があります。

す。しかし、罪を取り除くことは人間の力ではできません。そのように罪を負ったままどうすることもできない私たちひとりひとりを心から愛し、あわれまれ、私たちがご自分に立ち返ることを心から望んでおられる神様は、私たちとご自分とを隔てている罪をご自分のひとり子イエス様によって取り除いてくださったのです。イエス様は父なる神様に従順に従われ、人となってこの世に来てくださり、十字架に架かって私たち人間の罪を身代わりに負ってくださいました。イエス様は神様に対する従順の模範をこのような形で私たちにお示しになったのです。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

(ピリピ人への手紙2章6〜8節)

このようにして、父なる神様のみところに従順に従われて、卑しい人の姿で私たちのところに来てくださったイエス様は、次のようにおっしゃっています。

狐には穴があり、空の鳥には巢があるが、人の子には枕する所ありません。

(マタイの福音書 8 章 20 節)

この世に来られたイエス様は、私たち人間に救いの福音を、永遠のいのちの福音を宣傳えられた結果、歓迎どころか迫害をお受けになり、そのため安んじて眠る場所さえなかったのです。それでもイエス様はそのことについて思い煩われませんでした。父なる神にゆだねて従順に従われたからです。神様に似るものとして造られた私たちは、このイエス様の従順を模範とすべきではないでしょうか。

空の鳥、野の百合から神のみところを知る

私たちは、空の鳥、野の百合から、改めて人間であることは何を意味しているのか、また人間に対する神様のみところは何かを学びました。神様はご自分に似るものとして造られた私たちに、自分の考えを第一とするのではなく、神様に従い神様との正しい交わりを第一とすることを求めておられるのです。イエス様は空の鳥、野の百合について話されてから最後に、次のようにおっしゃいました。

そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなので

す。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。

(マタイの福音書 6章31〜34節)

イエス様を信じた結果、神様との正しい交わりを回復した者は、もはや自分のことについて心配する必要はありません。思い煩いは神様を知らない人々のすることであり、ただ神様のみこころに全き従順をもって従うことを第一とするなら、それに加えて必要なものはすべて神様が与えてくださるとイエス様が約束してくださっているからです。

ヤコブはイエス様を信じた人々に宛てた手紙の中で次のように言っています。

あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」

四 「空の鳥、野の百合を見なさい」

(ヤコブの手紙4章14、15節)

空の鳥、野の百合は明日のことを思い煩いません。私たちも空の鳥、野の百合のように、明日のことは明日を支配される神様ご自身が心配してくださることを確信して、今日と言う日を神様のみところにゆだね、全き信頼をもって感謝しつつ過ごすとき、神様はそのようなひとりひとりに最善をなしてくださいることを実際に体験することができなのです。

思い煩っておられる方は、どうか神様から離れていた罪を認め、イエス様が十字架の上で流された尊い血によって罪を赦していただき、神様との正しい交わりを回復していただき、揺るぐことのない神様の約束を一日も早くご自分のものとして体験されるようお祈り致します。

五 「私たちはキリストに会った」

その翌日、またヨハネは、ふたりの弟子とともに立っていたが、イエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の小羊。」と言った。ふたりの弟子は、彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った。イエスは振り向いて、彼らがついて来るのを見て、言われた。「あなたがたは何を求めているのですか。」彼らは言った。

「ラビ（訳して言えば、先生）。今どこにお泊まりですか。」イエスは彼らに言われた。「来なさい。そうすればわかります。」そこで、彼らはついて行って、イエスの泊まっておられる所を知った。そして、その日彼らはイエスといっしょにいた。時は十時ごろであった。ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちはメシヤ（訳して言えば、キリスト）に会った。」と言った。

五 「私たちはキリストに会った」

(ヨハネの福音書1章35〜41節)

今日はイエス様が、救われた私たちひとりひとりに望んでおられるイエス・キリストとの体験的出会いという大切なテーマについて、ごいっしょに考えてみたいと思います。まず最初に、聖書のこの箇所の中から「私たちはキリストに会った。」と言ったふたりの弟子のことから、イエス様との体験的な出会いについて考えてみましょう。

バプテスマのヨハネは、ユダヤの民がずっと待望していた神の御子キリストの来られることを神様から知らされ、その前に、水による悔い改めのバプテスマを人々に授けるようにと、ヨルダン川の岸辺ベタニヤの町に遣わされていました。そのヨハネが冒頭の箇所の出来事の前日に、自分の方に向かって歩いて来られるイエス様を見つけて「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」と、ついにお会いできた救い主イエス様を喜んで証しし、またこの方が神の御子であるということも証言したのです。

そこでその翌日、イエス様が歩いて行かれるのを見たヨハネが、ふたたび「見よ、神の小羊。」と言ったとき、それを聞いたふたりの弟子はどうしてもこの方について行きたいと思ったのです。

イエス様はこのふたりがご自分に会いたいと切望しているのをお知りになり、ふたりに

「来なさい」とおっしゃって、ご自分が泊まっておられる所まで来ることを許されました。そして「その日彼らはイエスといっしょにいた。」とあるように、その日ずっとイエス様といっしょにいたふたりはイエス様との交わりを通して、この方がほんとうに救い主、キリストであることを体験的に知ったのです。救い主、キリストに出会った喜びでいっぱいになったアンデレは、すぐさま自分の兄弟シモンを見つけ、心を踊らせながら「私たちは救い主、キリストに会った。」と語ったのです。

救い主、キリスト

ところでイエス様を信じていない人でも、よくイエス・キリストと続けて言います。しかしご存じのように、これはイエス・キリストという姓名ではありません。イエス・キリストとは、キリスト、すなわち救い主であるイエスという意味であります。それゆえキリストに会った、と言って喜ぶことのできるのは、イエス様を救い主と信じている人であってこそ言えることなのです。では、その救い主、キリストとはどんな方かということについて、ここで少しお話ししたいと思います。救い主とは、その言葉の通り、罪の泥沼の中でもがいているのも知らずに生きている私たち人間を、その泥沼から救い出してくださる

五 「私たちはキリストに会った」

ために、この世に来てくださった方です。それではその罪とはいったいどんな罪なのでしょう。それはご自分の最も愛するものとしてお造りになった人間が造り主である神様に目を向けようとせず、自分の勝手な判断や欲望に支配されて生きていることでもあります。そしてすべての人間はこの罪を持って生まれているために、ローマ人への手紙に、

罪から来る報酬は死です。

(ローマ人への手紙 6章23節)

と記されているように、みな死ななければなりません。そのような、神様からご覧になって救いようのない生き方をしている私たち人間をあわれまれた神様が、私たち人間のご自分に対する罪を取り除いてくださり、救い出してくださいるために私たちの所にお遣わしになった方、これが救い主、キリストです。神様はキリストを私たちの所にお遣わしになるといふ約束を、はるか昔から、旧約の時代に神様のみことばを伝える役目を与えられていた預言者たちの口を通してなさっていました。その一つ、預言者イザヤに示されたものを紹介します。

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、

平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。

(イザヤ書9章6〜7節)

神様は私たちに、ひとりの男の子を与えてくださる、しかしその男の子はただの人間ではなく、ご自分に背き、罰せられるべき私たち人間に、ご自分との平和をもたらし、私たちを永遠に治めてくださる神である、と約束しておられるのです。この方こそ神が人となられたイエス様であります。

父なる神のもとを離れ、この世に來られたキリスト

そのイエス様は私たちの痛み苦しみを理解し共有してくださり、私たちの罪を身代わりに負ってくださるために、父なる神様のもとを離れて、神でありながら人としてこの世に生れてくださいました。そして約二千年前、イエス様がこの救いの目的を達成されるために、人々の前にご自身を現わされたとき、多くの人々が人となってこの世に來てくださったイエス様に出会ったのです。おびただしい数の人たちがイエス様の顔を見たり、イエス

五 「私たちはキリストに会った」

様の話を聞いたり、イエス様のなさったわざ、奇蹟を体験しました。またある人たちは直接イエス様と問答もしました。けれども、そのような多くの人たちの中で、はじめに出て来たふたりの弟子のように、この方がキリストである、救い主である、とはっきり知って、心から喜んだ人々は非常にわずかでした。この方こそ自分が待ち望んでいたキリストであると確信できた人は、心を開いてイエス様の話に一心に耳を傾けたすなおな人たちだけでありました。イエス様ご自身が「わたしが聖書に預言されているキリストである。」とおっしゃっているにもかかわらず、イエス様を見た多くの人々にはそれがわかりませんでした。

イエスは、ご自分の育ったナザレに行き、いつものとおり安息日に会堂にはいり、朗読しようとして立たれた。すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を見つけられた。「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」イエスは書を巻き、係りの者に渡してすわられた。会堂にいるみなが目がイエスに

注がれた。イエスは人々にこう言って話し始められた。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」みなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いた。そしてまた、「この人は、ヨセフの子ではないか。」と彼らは言った。

(ルカの福音書4章16〜22節)

このように多くの人は、イエス様がご自身について書かれている聖書の箇所を読まれ、「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」とおっしゃったにもかかわらず、また読まれたみことばに喜び、かつ驚いたにもかかわらず、イエス様をただの人間としてしか見る事ができなかったのです。

キリストに会った人々

しかしバプテスマのヨハネの弟子のように、イエス様に会ってイエス様がキリストであることがわかった人々は他にもいました。そのひとりにはサマリヤの女でした。サマリヤ人とユダヤ人はもともと一つの民族でしたが、サマリヤ地方に北から攻め込んで来たアッシリヤに征服され、ここに移住した異民族との間に混血が進み、社会生活や宗教生活がユダ

ヤ人とたいへん異なるようになったために、ユダヤ人は彼らを異教徒として軽蔑していました。イエス様はサマリヤの町を通られたときに、この異邦人として軽蔑されていたサマリヤ人の女に飲み水を求められました。この女は次々に夫を変え、今もまた別の男と同棲しているふしだらな女でしたが、イエス様はじめて会ったこの女に、彼女がそれまでにしたことを適確に指摘され、またユダヤ人も異邦人もやがては同じまことの神様に礼拝するときに来ることをお話しになりました。そして最後に救い主、キリストを待ち望んでいるこの女に答えて、ご自身がキリストであることを明らかにしました。

女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシヤの来られることを知っています。その方が来られるときには、いっさいのことを私たちに知らせてください。」イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」

(ヨハネの福音書4章25〜26節)

イエス様がおっしゃったことに大きく心を動かされたこの女は、町へ行って人々にイエス様のおっしゃったことを言い広めました。サマリヤ人たちはどうしたでしょうか。聖書には次のように記されています。

さて、その町のサマリヤ人のうち多くの者が、「あの方は、私がしたこと全部を

私に言った。」と証言したその女のことばによってイエスを信じた。そこでサマリヤ人たちはイエスのところに來たとき、自分たちのところに滞在してくださるよう願った。そこでイエスは二日間そこに滞在された。そしてさらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた。そして彼らはその女に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです。」

(ヨハネの福音書4章39〜42節)

イエス様は、

わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために來たのです。

(マタイの福音書9章13節)

とおっしゃいましたが、ユダヤ人から罪人として軽蔑されているサマリヤ人が、自分たちこそ神に選ばれた正しい民であると豪語していながら、今もイエス様がキリストであることを受け入れることのできないユダヤ人よりも先に、キリストであるイエス様に出会って「この方はほんとうに救い主だ。」と心から喜ぶことができたのもまた、私たちの思いを越えた神様のみこころなのであります。

五 「私たちはキリストに会った」

またもう一つの例として、生れつき盲目であった人とイエス様との出会いがあります。ユダヤ人たちは、イエス様がキリストであると告白する者があれば、彼らの社会から追放すると決めていましたので、イエス様が生まれつきの盲人の目を癒されたことを聞いて、彼を詰問しました。しかし彼は、「あの方が神から出ておられるのでなかったら盲目に生れついた者の目を開けられるはずがありません。」と答えたために追放されてしまったのです。その結果については聖書のみことばから見てもみましょう。

イエスは、彼らが彼を追放したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」その人は答えた。「主よ。その方はどなたでしょうか。私がその方を信じることができますように。」イエスは彼に言われた。「あなたはその方を見たのです。あなたと話しているのがそれです。」彼は言った。「主よ。私は信じます。」そして彼はイエスを拝した。

(ヨハネの福音書9章35〜38節)

この生れながらの盲目の人は、自分の長い間の苦しみを通して心が砕かれていたためにイエス様に肉眼だけでなく、霊の目も開いていただいたときに、イエス様をキリストとして霊の目で見ることで、イエス様を救い主と信じることができたのです。

このように、イエス様に出会ってイエス様がキリストである、と信じていることができた人たちは、自分を義、すなわち正しいとしている人ではなく、みな自分がいかに小さく無力であるか、正しいことは何もできず、肉の誘惑にすぐに負けてしまうような弱い者かを思い知っている人々でありました。ですから彼らはイエス様がキリストであると知ったときに、ただ信じただけではなく、みな心から喜んでいます。これがイエス様がキリストであることを知った人間の反応です。私たちがキリストであるイエス様に出会ったかどうかは、これと同じように、私たちにこの霊的な喜びがあるかどうかによって判断できると言ってもよいと思います。

天に戻られた後でもキリストに出会うことができる

イエス様は私たち人間の罪を贖うため十字架にお架かりになり、イエス様を信じる者に朽ちないよみがえりのいのちを与えてくださったため三日後に復活なさいました。そしてイエス様は復活なさったご自分を、弟子たちをはじめ五百人以上のイエス様を信じる人々の目の前にお現わしになってから天にお戻りになりました。イエス様が天に戻られてからは、私たち人間はそのイエス様を肉の目で見ることができず、触れることもできません。では、

五 「私たちはキリストに会った」

イエス様が天に戻られた後に人はもうイエス様と出会うことはできないのでしょうか。決してそうではありません。イエス様は地上に残された人々が、肉の目では見えなくても救い主であるイエス様と出会うことができるようにしてくださったのであります。そして今日まで多くの人々がキリストに出会っていますし、これからその体験をされる方がたくさん出て来るはずです。

わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。

(ヨハネの福音書14章16〜17節)

助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

(ヨハネの福音書14章26節)

とイエス様が天に昇られる前に約束してくださった助け主としての真理の御霊、聖霊によって、また聖書のみことばや兄弟姉妹との交わりを通して、また祈りを通して霊的にイエス

様と出会うことができます。

私たちが砕かれた心をもってイエス様をもっと深く知ることができるように、イエス様との霊的な出会いをさせていただくように心から祈り求めるとき、御霊の助けによってイエス様は目には見えなくてもいつも私たちとともにいてくださることを確信させていただきます。そして聖書のみことばによって心を満たしてくださり、平安を与えてくださり、試練に会ってもイエス様にすべてをおゆだねすることができる揺るがない確信を与えてくださるのです。これが、主イエス様との個人的な出会いにほかなりません。

ここで一つお話したいことがあります。それは、このようなイエス様との個人的な出会いを持っていなくても、救われている方はいらっしゃるということです。神様の前にご自分の罪を認め、悔い改めて、助けてくださいと祈った方は、次のみことばの通りに救われているのです。

主の名を呼ぶ者は、みな救われる。

(使徒の働き2章21節)

では、救われて、罪赦され、天の御国に入れていただければ、それだけで十分なのでしょうか。イエス様は信じた人々が、そのようにキリスト者として生まれたばかりの状態にと

五 「私たちはキリストに会った」

どまっていることをお喜びにはならないのです。救いに与かった人々がみな、更にご自分と個人的な、人格的な出会いをして成長してほしいと望んでおられます。パウロは次のように言っています。

私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです。

(テモテへの手紙第二一章12節)

「私のお任せしたものを」とはパウロの信仰であり、また彼のいのちであります。「かの日」と言うのは、イエス様が迎えに来てくださるご再臨の日、あるいは天に召されて神様の前に立つ日であります。このように言うことができるのは、彼がイエス様と個人的に出会い、霊的な交わりを通してそれがどれほど素晴らしいものかを体験的に知ったからにはかなりません。その結果パウロはイエス様にすべてをおゆだねすることができたのです。

主イエスは救われたすべての人との親しい交わりを望んでおられる

イエス様は聖書の中に出て来る人々だけではなく、イエス様が罪から救い出されたすべ

ての人に、このような出会いの体験を持ってもらいたいと願っておられます。イエス様はすべての人を救うために十字架にお架かりになりましたが、すなおにイエス様を信じ、救われたひとりひとりに、更にご自分との親しい交わりの体験を持つことを切望しておられるからです。

またヨハネの黙示録の三章二十節でイエス様はこうおっしゃっています。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

(ヨハネの黙示録3章20節)

これはイエス様を信じた人たちに対して、また教会に対して言っておられるみことばであります。すでにイエス様を信じ受け入れながらイエス様を心の外に締め出して生きている者を指しておられます。締め出されたイエス様は私たちの心の扉の外に立ってください、心の扉を叩いて「わたしはあなたのところに入ってともに食事をしたい、個人的な親しい交わりをしたい。」とおっしゃっているのです。イエス様から心が離れて、さまよい歩いているような者さえ、どこまでも見捨てずに心配してくださるイエス様の愛は、何

五 「私たちはキリストに会った」

と深い愛でありましょうか。

イエス様の呼びかけに耳を開いて、イエス様ご自身との人格的交わりをいただいた結果は、私たちの中に起こる深い霊的な喜び、平安、希望と、イエス様に対する絶対的な信頼と感謝であります。この体験を一度持った方は、もうイエス様から離れることはありません。その方の価値観は一変し、その人生の目的はまったく新しいものとなります。どうか、このすばらしいキリスト・イエスとの出会いを体験なさり、「私はキリストに会った。」と証しながら、喜びをもってキリストのものとしての新しい歩みに導かれますように、心からお祈りいたします。

六 主が悔い改めを急がれる理由

時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。

(マルコの福音書1章15節)

冒頭のみことばは、イエス様がガリラヤで福音伝道の第一声をあげられたときのメッセージです。イエス様は、ここで「時が満ち、」とおっしゃっています。この「時」とは神様のみどころが成る時であります。神様は人間の罪のために汚されたこの世界を終わらせ、罪のない聖い人間だけが入ることのできる新しい世界を創造すると、聖書の中ではつきりと語っておられます。したがって「時が満ち、」とは、この神様のみどころが成就される時が熟したということでもあります。私たちは、今、世界やわが国で起こっているさまざまな出来事を見ると、それらが人間の自己中心的な考えや行動によって、言いかえれば人間の罪によって起こっていることがわかります。そして多くの方々が、このように急速に

日本が、また世界が動いて行くと、この先どうなってしまうのだろうかという大きな不安を覚えておられることと思います。私たちはこのような状況にある今の時こそ、イエス様がおっしゃったこのみことばに心を留め、神様に悔い改めることを、真剣に考えなければならぬのではないでしょうか。

人に対する悔い改めと神に対する悔い改め

私たちは日常生活の中で、後悔したり、反省したりすることは少なくありませんが、悔い改めということはあまりしないのではないのでしょうか。こう言いますと、後悔あるいは反省と悔い改めは同じではないか、と思う方がおられるかも知れません。しかし、悔い改めは後悔とか反省とは違うのです。後悔する、あるいは反省するとは、あんな事をしなければ、あるいは言わなければよかったというように、自分の言動を顧みることにとどまりますが、悔い改めは自分の犯した事を悔いるだけでなく、その悪い行ないを改めることなのです。もしある人が刑法上の罪を犯し、法律によって罰せられ、しかもその人がほんとうに悪かったと反省した場合、あるいは法律にふれるような罪ではなくても、人を偽ったり、人の心を傷つけたりしたときに、悔いてあやまり、「私は悪いことをしました、もう

決してそのようなことはありません。」と誓えば、私たちはあの人は悔い改めたというように受け取ります。しかしこれは人としての悔い改めであり、それを受け入れた相手が許したとしても、あくまでも不完全な人間どうしの間における、人に対する悔い改めにとどまるだけに過ぎません。

しかし、イエス様はどのような悔い改めをなさいとおっしゃったものではありません。

「悔い改めて福音を信じなさい。」と言われたのです。ここに、この世的な悔い改めと、聖書で言うところの悔い改めとの明らかな違いがあります。

聖書でいうところの悔い改めは、神様に対する悔い改めであり、この悔い改めは神様に立ち返って神様によって完全に赦していただき、罪から救い出していただくための前段階として必要不可欠な条件なのであります。預言者イザヤは次のように言っています。

悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ、豊かに赦してくださいから。

(イザヤ書55章7節)

ここに言われている「悪者」とは、世間で言うところの悪者とは意味が違い、神様に背

を向けて自分の考えを第一とし、それに頼って生きる人間であり、聖書で言う罪人とはまさにこのような人間なのです。ですからイザヤは神様を第一とするのでなく自分の考えを第一とし、自分を高くするという罪を犯している私たちに対して、自分中心の考えを捨て、へりくだってまず神様のもとに立ち返りなさい、そうすれば神様はあわれんでくださると言っているのです。このように、悔い改めは神様に対する背きの罪を犯した人間と神様との関係を回復するために、まずなされなければならない、たいへんに大切な行為なのです。神様に対するこの悔い改めについて更に考えを進めてみましょう。

悔い改めは神の大きなあわれみの上に成り立つ

まず第一に神様に対する悔い改めは、罪に汚れた人間をなお愛してくださる神様の大きなあわれみの上に成り立つものであることを知る必要があります。このことは預言者たちを通して神様ご自身が、ご自分の思いを次のようにはっきりと示されたことからよくわかります。神様は預言者エゼキエルに次のように語られました。

人の子よ。イスラエルの家に言え。あなたがたはこう言っている。「私たちのそむきと罪は私たちの上のしかかり、そのため、私たちは朽ち果てた。私たちはど

うして生きられよう」と。彼らにこう言え。「わたしは誓って言う。——神である主の御告げ。——わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。」

(エゼキエル書33章10～11節)

また神様は預言者エレミヤには次のように語られました。

エフライムは、わたしの大事な子なのだろうか。それとも、喜びの子なのだろうか。わたしは彼のことを語るたびに、いつも必ず彼のことを思い出す。それゆえ、わたしのはらわたは彼のためにわななき、わたしは彼をあわれまずにはいられない。

(エレミヤ書31章20節)

エフライムとは当時偶像礼拝をしていた北イスラエルの国のことであります。神様はご自分以外の偶像の神を拝むという罪を犯した北イスラエルの民さえも愛し、あわれみ、「はらわたがわななく」ほどに悲しんでくださるのです。

また、私たちを罪による滅びから救い出してくださるために、神の座から降りてこの世

に来てくださった神の御子イエス様もこう言われました。

医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。「わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。」とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。

(マタイの福音書9章12〜13節)

このように、悔い改めにはご自分に背き、敵対している悪者をも、なお愛し、あわれんで滅びないようにと呼びかけてくださる神様の深いあわれみが、まず基本にあることを覚える必要があります。

悔い改めには罪の自覚と深い悲しみが伴う

次に神様に対する悔い改めには、自分が犯した罪の自覚とそれに対する深い悲しみを伴っていることが大切です。主なる神様は預言者ヨエルを通して心を引き裂き、嘆きと涙をもって悔い改めなさい、と命じておられます。

「しかし、今、——主の御告げ。——心を尽くし、断食と、涙と、嘆きとをもって、わたしに立ち返れ。」あなたがたの着物ではなく、あなたがたの心を引き裂け。

あなたがたの神、主に立ち返れ。主は情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵み豊かで、わざわざいを思い直してくださるからだ。

(ヨエル書2章12〜13節)

もし、私たちが謙虚に自分自身のありのままの姿を心の鏡に写したら、わがままで自分のことしか愛せない、どうしようもなく醜い自分が見えるのではないでしょうか。詩篇の作家は次のように自分の罪の醜さ、重さを心から嘆いています。もし私たちが「このことは自分にもそのまま当てはまることだ。」とすなおに同意できれば、それは神様に対する悔い改めの条件が整っていると言えましょう。

神様は私たちの悔い改めが、心の底からのものであるかどうかをご覧になります。聖書には、神様が異邦人であるニネベの人々の悔い改めが心からのものであることをご覧になって彼らを赦されたことが記されています。

ヨナは初め、その町にはいると、一日中歩き回って叫び、「もう四十日すると、ニネベは滅ぼされる。」と言った。そこで、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者から低い者まで荒布を着た。このことがニネベの王の耳にはいると、彼は王座から立って、王服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中にすわった。王と

大臣たちの命令によって、次のような布告がニネベに出された。「人も、獣も、牛も、羊もみな、何も味わってはならない。草をはんだり、水を飲んだりしてはならない。人も、家畜も、荒布を身にまとい、ひたすら神にお願ひし、おのおの惡の道と、暴虐な行ないとを悔い改めよ。もしかすると、神が思い直してあわれみ、その燃える怒りをおさめ、私たちは滅びないですむかもしれない。」神は、彼らが惡の道から立ち返るために努力していることをご覧になった。それで、神は彼らに下すと言っておられたわざわいを思い直し、そうされなかった。

(ヨナ書3章4〜10節)

このように神様に対する悔い改めは、私たちをあわれんでくださる神様に立ち返ることが伴っていなければならないのです。

律法によるのではなく、主イエスによって神に立ち返らせてくださる

旧約の時代には、悔い改めて神様に立ち返ることは神様から人間に与えられた律法に正しく従うことをもって証しとされました。しかし、神様に与えられた律法を完全を守ることが不可能な人間をあわれまれた神様は、そのような私たち人間の罪を赦すために、律法

を守ることに、罪の代価としてこの世界に遣わされた御子イエスを自分の救い主として信じ、受け入れることによって、神に立ち返ることを可能にしてくださいました。

見よ。その日が来る。――主の御告げ。――その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。

（エレミヤ書31章32節）

この新しい契約とは、神の御子イエス様が十字架上で私たちのために流された血による完全な罪の赦しによって結ばれた契約であります。

食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。」

（ルカの福音書22章20節）

冒頭のみことばの中の「悔い改めて福音を信ぜよ。」というイエス様のメッセージはこのことを意味しているのです。福音とはイエス様の十字架での死によって、私たちの罪が赦されたということにほかなりません。どんなに正しい行ないをしようと思ってもでき

ない私たちにとって、この新しい契約は、はかり知れない恵みであります。

悔い改めは神に直接に、すべて隠さずに

神様に対する悔い改めは、神様に直接に、しかもすべて隠さずに心からすることが大切です。その意味で次に挙げたダビデの悔い改めの祈りは私たちにとってよい手本ではないでしょうか。

神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください。どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。

(詩篇51篇1〜4節)

しかし、私たちは信じてから後も、天に召されるまではこの世にあって不完全な肉をもつて生きているために、しばしば神様に罪を犯してしまいます。けれども罪に気づいたとき、

すぐにそれをイエス様の前に言い表わして悔い改めれば、イエス様は父なる神様にとりなしてくださると次のみことばによって約束してくださっているのです。

罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです。

(ローマ人への手紙8章34節)

キリストは永遠に存在されるのであって、変わることをない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

(ヘブル人への手紙7章24、25節)

悔い改めが手遅れになる場合

しかし、もし神様に対する悔い改めが手遅れになった場合はどうなるのでしょうか。神様に対する悔い改めが手遅れの場合の一つは、まったく悔い改めずに死んだ場合です。死ん

だ後で悔い改めようとしても死後に救いの機会がないからです。イエス様は悔い改めることとなしに死んでよみに落とされた金持ちに、アブラハムの口を借りて次のように宣告されています。

私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることができないのです。

(ルカの福音書16章26節)

死んでから神様に悔い改めをしようとしても、もはや手遅れであることがこのみことばからもわかります。

それならば死ぬ間際に神様に悔い改めればよいのではないか、生きている間は自分の思いのままに自由に生きたいからと考える方もいるでしょう。もし私たちが自分の死の時を正確に予測できれば、それも可能でしょう。しかし、人間が自分の死の時を予知することを神様は許しておられません。病気によるか、災害によるかにかかわらず、死は何時訪れるかわからないのです。イエス様は次のようなたとえを話されました。

ある金持ちの畑が豊作であった。そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。「どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。」そして言った。「どうしよう。」

あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。『たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』しかし神は彼に言われた。「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。……。」

(ルカの福音書12章16〜20節)

またヤコブは次のように記しています。

あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。

(ヤコブの手紙4章14節)

ですから手遅れにならないうちに自分の罪を神様の前に悔い改めることが、救われるために最も大切なことです。

手遅れになるもう一つの場合は、悔い改める以前に、終わりの日、すなわちさばきの日が来てしまう場合です。イエス様は次のようにおっしゃっています。

六 主が悔い改めを急がれる理由

わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。

(ヨハネの福音書12章48節)

さばきの日はいつ来るか

では終わりの日、神様のさばきの日はいつ来るのでしょうか。この問いに対してイエス様は、

人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。

(マタイの福音書24章37～39節)

とされています。このように終わりの日は、私たち人間にそれがいつか予測することはできません。しかし今、終わりの日の近いことは、その前兆として次のようにイエス様が言われたことが、すでに現実に私たちの回りに起こっていることから私たちは察知する

ことができます。

イエスがオリブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話してください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たのはありません。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。」

(マタイの福音書24章3～8節)

神の国は近くなった

イエス様は冒頭のみことばの中で、「神の国は近くなった。」と言われました。これには二つの意味が含まれています。

一つは、神の御子イエス様が、神様と神様に背いた罪人である私たち人間との和解の仲介者としてこの世に来てくださり、私たち人間の罪を身代わりに負って十字架に架かり、罪を贖ってくださったという大いなるみわざによって、私たちが神の国に入ることできる道が整えられたという意味です。イエス様が神の国への道そのものとなってくださったのです。イエス様は次のようにおっしゃっています。

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のもとに来ることはありません。

(ヨハネの福音書14章6節)

もう一つの意味は、イエス様がこの世に來られたことによって、人間の罪に汚されたこの世界を滅ぼして、新しい聖い神の国を創造されるという、神様のご計画が近くなったということです。神様は預言者イザヤを通して次のように約束しておられます。

見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。

(イザヤ書65章17節)

またヨハネは黙示録に啓示によって次のようにこの光景を記しています。

また私は、新しい天と地とを見た。以前の天と、地は過ぎ去り、もはや海もない。

私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」

(ヨハネの黙示録21章2〜5節)

愛とあわれみに富みたまう神様は、私たちがさばかれて滅びることを悲しまれ、ひとりでも滅びることなく悔い改めてご自分に立ち返り、新たないのちによって永遠に生きることを望んでくださっています。ペテロは次のように書いています。

主は、ある人たちがおそいと思っただけで、その約束のことを遅らせておられるわけではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

六 主が悔い改めを急がれる理由

(ペテロの手紙第二章9節)

私たちは、この主なる神様のあわれみと忍耐を感謝し、時が満ちた今、手遅れにならぬよう、ひとりでも多くの方が神様の呼びかけにすなおに従い、悔い改めて神様に立ち返られるように切に祈りたいと思います。

七 人間の究極的な行き先

人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。そうして、王は、その右にいる者たちに言います。「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。」

(マタイの福音書25章31〜34節)

それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。」

こうして、この人たちは永遠の刑罰にはいり、正しい人たちは永遠のいのちには

いるのです。

(マタイの福音書25章41・46節)

今日聖書からごいっしょに考えてみたいテーマは、人間の究極的な行き先についてであります。人間の究極的な行き先と言えば、天国と地獄であることはもうおわかりのことと思います。

人間にはふた通りのタイプがある

人間にはふた通りのタイプがあります。一つは、聖にして義なる神様の前に立っても、自分の正しさを主張し続ける傲慢な人間、もう一つは、それと反対に、自分を愛してくださる神様をないがしろにしてわがままに振る舞っていた罪に気づき、神様の前にへりくだって赦しを乞う人間であります。前者の行き着く先は永遠の刑罰を受ける所、すなわち地獄であり、後者の行き先は永遠のいのちを与えられた者だけが入ることのできる所、天国であります。どんな人間でも、究極的な行き先は神様によってのどちらかに決められます。その中間はありません。私たちは、そのどちらかに行くしかないのです。ですから、この二つの行き先について今から私たちがよく知っておくことはたいへん大切であると思います。

す。そこでこれから聖書を通して、この二つの行き先である天国と地獄について考えてみたいと思います。

天国とはどんな所か

まず、聖書で天とも、神の国あるいは御国とも呼ばれる天国とはどのような所でしょうか。

一、天国の住民とは

第一に、天国は神様と神の御子イエス様、および天国の国籍を与えられた神のしもべが住む所であります。神のしもべとはだれのことを指しているのでしょうか。それは自分の罪を認め、イエス様の十字架上の贖いによって、その罪が赦されたことを心から信じて救われた人々のことでもあります。

天国には神の王座と神の御子の王座があり、聖にして義なる全知全能の神様と御子イエス様が座して聖なる御国を統治しておられます。

主は天にその王座を堅く立て、その王国はすべてを統べ治める。

ここで言っている主とは、父なる神、神の御子なる神イエス様であります。また、その神様のあわれみによって御子イエス様を信じる信仰を与えられ、罪から救い出されて神のしもべとされた人たちが、この天国の住民なのであります。

自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通って都にはいれるようになる者は、幸いである。

(ヨハネの黙示録22章14節)

自分の着ている罪という、しみに汚れた着物は、人間の知恵や努力でどんなにいつしうけんめいに洗っても真っ白にすることはできません。イエス様が十字架で流してくださいした聖い血で洗われてはじめて完全に白くなるのです。そしてその真っ白な着物を着た者だけを神様は義、すなわちまったく正しい者と認めてくださって、永遠のいのちの木の実を食べる権利を与えてくださり、天国の都の門をくぐることを許してくださるのであります。

もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあって、そのしもべたちは神に仕え、神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついて

(詩篇103篇19節)

いる。

(ヨハネの黙示録22章3〜4節)

このようにして神様のしもべとされた者は、天の都で父なる神と御子なるイエス様の御座の近くに侍って神様の御顔を仰ぎ見つつ、主とともにある永遠に平安な日々を過ごすことができるのです。そして、その人たちの額には神様のものとされたしるしとして、神の名の印が押されているのであります。これは考えられないような永遠の幸せであり、栄誉ではないでしょうか。

二、天国には死、苦しみ、悲しみ、夜がない

第二に、天国には、死も、涙も、悲しみも、苦しみも、夜もないのです。

そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

(ヨハネの黙示録21章3〜4節)

この世は神様に敵対する惡に支配された世であり、不義の世であります。そのような所に生きている間、私たちは死や悲しみや叫びや苦しみを避けることはできません。しかし、天国に移された者にとっては、もはやこの世は過ぎ去ったものであり、すべての悲しみや苦しみから完全に解放されるのであります。この世は靈的な闇の世界、真っ暗な夜の世界であります。サタンや罪人は神様の光よりも闇を好みます。そして罪は闇に隠れた所にしか存在しません。しかし、天国には夜がありません。ですから罪の氣配すらありません。神様とイエス様のご栄光がいつも照り輝いているからであります。

都には、これを照らす太陽も月もいません。というのは、神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからである。

(ヨハネの黙示録21章23節)

もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは永遠に王である。

(ヨハネの黙示録22章5節)

三、天国の光景

第三に、天の都の光景は、想像を越えたすばらしいものです。

聖書の中の「ヨハネの黙示録」には、神様がヨハネに啓示されたすばらしい天国の情景が記されているので、抜き出してご紹介しましょう。

都には神の栄光があった。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであった。

（ヨハネの黙示録21章11節）
その城壁は碧玉で造られ、都は混じりけのないガラスに似た純金でできていた。
都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。

（ヨハネの黙示録21章18～19節）
また、十二の門は十二の真珠であった。どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは、透き通ったガラスのような純金であった。

（ヨハネの黙示録21章21節）
御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊

との御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。川の兩岸には、いのちの木があつて、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。

(ヨハネの黙示録22章1〜2節)

このような聖さに満ち満ちたすばらしい所で、父なる神様、神の御子イエス様とともに永遠に憩うことができるとは、何という幸せでしょうか。

四、天国に入る者の受ける報賞

第四に、天国に入る者に、主はその働きに応じて報賞をお与えになります。

このすばらしい天国に入るには、イエス様の十字架の死が自分の罪のためであったことを知って、心から主の前にこれまでの背きの罪を悔い改めること、そうすればだれでも入らせていただけるのです。しかもそれだけではなく、天国に入る者に対して、神様、イエス様はいろいろな褒美を与えてくださいます。そのご褒美は、その人がこの世に置かれていたときに、どのくらい主のしもべとして主のために働いていたかという程度、主にどれほど忠実に従ったかの度合いに応じて、さばきの日に公平に与えられます。これについて、

パウロは次のように言っています。

与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。

(コリント人への手紙第一 3章10～15節)

パウロはこのように、キリスト者の信仰の働きをイエス様という土台の上に建てた建物にたとえています。神様は各人が建てた建物を火によって試されて、それぞれに応じた報酬を与えられるが、焼け落ちてしまうような建物しか建てなかった人でも、イエス・キリ

ストという土台だけ残っていれば、その人は報賞はただけいなくても天国に入ること
はできると言っているのです。そして、さらに次のようにも言っています。

競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということ
を知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りな
さい。また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を
受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするの
です。ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を
打つような拳闘もしてはいません。私は自分のからだを打ちたたいて従わせませ
う。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるよう
なことをしないためです。

(コリント人への手紙第一 9章24〜27節)

これはイエス様のしもべとされたすべてのキリスト者にも当てはまることであります。
キリスト者が目的にすべきゴールははっきり決まっています。そこに向かって私たち主の
しもべは走るのです。私たちはときどき疲れて立ち止まりたくありません。しかし彼
が言っているように、怠惰^{たいだ}な自分の外なる人を打ち叩いて従わせつつ、主から朽ちない報

賞をいただくことを目指して走るのであります。

イエス様を信じた者はだれでも、救われたら一日でも早く天国に行きたいと思うのではないでしょうか。天国はさきほど申しましたようにすばらしい所だからです。しかし多くの場合、そのように念願してもなかなかお許しができません。それは、主のためにしばらくの間、この世で働くようにというみこころだからであります。そのことを知っていながら怠けていて、主のために何もしなかったなら、主からお預かりしたタラントを主のために活用しなかったなら、天国に上げられたときに、主から「あなたは、なんと怠慢なしもべなのか。あなたに預けたタラントはどうしたのか。」と言われてしまうのです。私たちは、土台だけ残るような信仰の歩みではなく、試練の火にも焼かれぬ信仰の建物を建てるように主が望んでおられ、またそれに報いたいと思っておられることを念頭において、この世の歩みを続けたいと思います。

地獄とはどんな所か

次に地獄はどのような所で、また、なぜ地獄があるのかということを考えてみたいと思います。

一、地獄は罪人が永遠の滅びの刑に服する所

第一に、地獄は神様からさばかれた者が永遠の滅びの刑に服する所です。

神様を恐れず、神様の愛を拒み、神様に逆らい続けた者は、世の終わりのさばきの日に神様から滅びの宣告を受けて、永遠の苦しみの刑に服さなければなりません。

そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けます。

(テサロニケ人への手紙第二一章7～9節)

永遠の滅びの刑罰というのは、神様から見捨てられ火と硫黄の池に投げ込まれて永遠に苦しむという、肉体の死よりもはるかに恐ろしい刑罰であり、これを第二の死と言います。その刑罰を受けるのはどのような人々かということについて、聖書は詳しく述べています。獣は捕えられた。また、獣の前でしるしを行ない、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼といっしょに捕えら

れた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。

(ヨハネの黙示録19章20節)

獣とは自分を神として振る舞う、終わりの世に現われる支配者、反キリストのことです。

そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。

(ヨハネの黙示録20章10節)

また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに應じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおの自分の行ないに應じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

（ヨハネの黙示録20章12～15節）
このように、悪魔、反キリスト、偽預言者、そして神様を恐れず、自分の罪を悔い改めない者、すなわち神様を信じた者の名が記されている「いのちの書」に名前が記載されていない人々は、すでに死んだ者も含めて、すべて第二の死を地獄で味わうことになるのであります。

二、地獄は実在する

第二に、地獄はほんとうに存在しているのでしょうか。

地獄は人間が考え出したもので、そんなものは実在しないと云っている人がいます。しかし厳然として地獄は実在しています。聖にして義なる神様がおられる以上、地獄はあります。なぜ地獄があるのでしょうか。ある人は、「聖書の神は愛の神といわれているのに、その愛の神が人間をさばいて地獄に送るなどと言うのはおかしいではないか。」と言います。しかし聖書の神様は愛であると同時に、聖にして義なる神であります。神様ご自身がご自分について、そのように言っておられます。

わたしは主、正義を語り、公正を告げる者。

もし、すべての人が神様の前に正しく、聖くあることができれば、地獄は必要ありません。しかしご存じのように、そのようなことは望みうべくもないことです。それとは逆に、すべての人が神様に背き、神様に不義を働くものであるからです。

愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい不正を行なっている。善を行なう者はいない。神は天から人の子らを見おろして、神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうかをご覧になった。彼らはみな、そむき去り、だれもかれも腐り果てている。善を行なう者はいない。ひとりもない。

善とは、神様を信じ、神様のみこころに従うことであります。したがって「神はいない」と言っている者は、当然ながら善を行なうことができるはずがないのです。

主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立ちえましよう。

まさにその通りであります。そして聖にして義なる神様は、そのご性質ゆえに不義なる人間をそのままに赦すことはなさいません。

主は義によって世界をさばき、公正をもって国民にさばきを行なわれる。

(詩篇9篇8節)

神様は、ご自身が義であることを示されるために、地獄を設けてさばきの刑を実行されるのです。したがって、罪に汚れた人間が、地獄の存在と必要性を疑うことは、義なる神様をあなどることになるのであります。もし地獄がなければ、十字架による罪の救いも必要になります。神の御子イエス様は何のためにわざわざ人となって十字架の上で肉を裂き、血を流して苦しまれたあげくに死なれたのか、その尊い罪の贖いのみわざは、まったく無意味なものになってしまします。神様が義であられる以上、地獄は厳然として存在しているのです。しかし神様は義であられると同時に愛の方であられます。したがって人間を地獄に送ることを決して喜んではおられないのです。神様は次のようにおっしゃっています。

彼らにこう言え。「わたしは誓って言う。——神である主の御告げ。——わたし

は決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きるこ

とを喜ぶ。悔い改めよ。惡の道から立ち返れ。」

(エゼキエル書33章11節)

天国か地獄かの二者択一

私たちは、人間の究極的な行き先である天国と地獄について、いろいろなことを聖書によって考えて来ました。そしてその結果、私たちの前には、天国か地獄か二つに一つの選択肢しかないことを知りました。私たちは自分自身にどちらを選ぶべきかを問う必要があります。もし天国に行きたいのであれば、イエス様の所に行くしか方法はありません。イエス様ご自身がおっしゃっています。

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

(ヨハネの福音書14章6節)

人間が天国に行くためには、宗教を信じるのではなく、天から降りて来られた神の御子イエス様という、いのちの道を通る以外にほかの道はありません。この道は、罪から救い出された者だけが通ることができます。そして罪からの救いはイエス様だけがおできにな

るのです。

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

(使徒の働き4章12節)

モーセは神様の導きに従ってイスラエルの民を率いてエジプトから脱出させ、カナンの地まで行く途中、モアブの地で彼らに次のように言いました。

見よ。私は、確かにきょう、あなたの前にいのちと幸い、死とわざわいを置く。私が、きょう、あなたに、あなたの神、主を愛し、主の道に歩み、主の命令とおきてと定めとを守るように命じるからである。確かに、あなたは生きて、その数はふえる。あなたの神、主は、あなたが、はいつて行って、所有しようとしている地で、あなたを祝福される。しかし、もし、あなたが心をそむけて、聞き従わず、誘惑されて、ほかの神々を拝み、これに仕えるなら、きょう、私は、あなたがたに宣言する。あなたがたは、必ず滅びうせる。あなたがたは、あなたが、ヨルダンを渡り、はいつて行って、所有しようとしている地で、長く生きることはいできない。私は、

きょう、あなたがたに対して天と地とを、証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。

(申命記30章15〜19節)

この言葉は、とりもなおさず神様が今、私たちひとりひとりに語りかけ、あわれみをもって勧めてくださっていることなのです。私たちが永遠のいのちと祝福に満ちた天国を選ぶか、永遠の死とのろいに満ちた地獄を選ぶか、神様はその選択を私たち自身に任せてくださっていることを知らなければなりません。最初に、ふた通りの人間があると申しましたが、このメッセージを通して、まだ救いに与かっておられないおひとりおひとりの方が、自分の正しさを主張することを止め、神様の大きな愛の前にへりくだって、神様が差し出された「いのち」を悔い改めと感謝をもってお受け入れになりますように心からお祈り致します。

八 「私にあるものを上げよう」

ペテロとヨハネは午後三時の祈りの時間に宮に上って行った。すると、生まれつき足のきかない男が運ばれて来た。この男は、宮にはいる人たちから施しを求めるために、毎日「美しの門」という名の宮の門に置いてもらっていた。彼は、ペテロとヨハネが宮にはいるうとするのを見て、施しを求めた。ペテロは、ヨハネとともに、その男を見つめて、「私たちを見なさい。」と言った。男は何かもらえと思うて、ふたりに目を注いだ。すると、ペテロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」と言って、彼の右手を取って立たせた。するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、おどりがあってまっすぐに立ち、歩きだした。そして歩いたり、はねたりしながら、神を賛美しつつ、ふたりといっしょに宮にはいって行った。人々はみな、彼

が歩きながら、神を賛美しているのを見た。そして、これが、施しを求めるために宮の「美しの門」にすわっていた男だとわかると、この人の身に起こったことに驚き、あきれた。

（使徒の働き3章1〜10節）

今日は、聖書のこの箇所から、ペテロとヨハネのしたことを通して、私たちイエス様を信じた者の歩みについて、ごいっしょに考えてみたいと思います。

ペテロの持っていた大切なもの

この箇所を読むときに、私たちはうっかりすると、生まれつきの足なえの男をペテロが信仰によって癒したということだけが目に止まってしまいがちです。しかし、ここに書いてあることにはもっと深い意味が含まれているのではないでしょうか。もう一度この箇所をたどってみますと、足なえの男が他の人に物乞いしたと同じようにペテロにも物乞いしました。ペテロは彼を見てほんとうに気の毒に思ったことでしょう。そしてペテロは彼を持っていた大切なものを足なえに上げたのであります。彼が持っていた大切なものは金銀ではありませんでした。ペテロは貧しく、人に上げられるようなお金は持っていませんで

八 「私にあるものを上げよう」

した。では何か品物を上げたでしょうか。上げられるような品物ありませんでした。しかし、このような貧しいペテロは、実はだれよりも富んでいたのです。では彼の持っていた富とは何でしょうか。それは主イエスの御霊でありました。パウロは次のように言っています。

あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父。」と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。

（ガラテヤ人への手紙4章6節）

神様は、イエス様を信じた者を、ひとり残らずご自分の子どもとしてくださいます。そして神の子どもとした私たちに、「お父様」と呼ぶことができるという何ものにも勝る特権を与えてくださったのです。イエス様を信じていない人は、神様が自分の父であることを知ることができません。私たちが神様に対して「お父様」と呼べるのは、イエス様が御霊を私たちの心に遣わしてくださったからです。神の子どもたちの私たちが持っている宝とは、このイエス様の御霊なのであります。

ペテロは足なえの男に、自分が持っている最も大切な宝物であるこのイエス様の御霊を上げようと思い、イエス様に祈りながら足なえの手を取って立ち上がらせました。すると、

これを見た人たちはペテロが足なえを癒したと思いました。足なえを癒したペテロの力、ペテロのわざを見て彼らは驚いたのです。しかしペテロはそれを直ちに否定しました。それだけでなく、彼は自分の信仰深さが足なえを癒したのでもないと言いました。なぜペテロはこのように言えたのでしょうか。

イエス・キリストを入れる器

彼は、自分はまったく何の力もない者であって、イエス様を入れる器に過ぎない、イエス様を伝える管に過ぎないと考えていたのです。パウロも次のように言っています。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

(ガラテヤ人への手紙2章20節)

私たちは、この宝を、土の器の中に入れていっているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるため

す。

(コリント人への手紙第二4章7節)

パウロの言う通り、イエス様を信じた私たちは、もはや自分が生きているのではなく、自分のからだは単なる土の器に過ぎないこと、したがって器そのものには何の力もないことを知っています。しかし、それと同時に私たちは、この土の器の中にはイエス様という宝、イエス様の御霊という測り知れない力を持つ宝が入っていることも知っています。ペテロはこの宝を足なえに分けて上げたのです。ですからペテロは、足なえが立ち上がることでできたのはペテロの力ではなく、ペテロの中におられるイエス様の力によるものである、ということを群衆にはっきりと証したのであります。

イエス様を入れる器とされるためには

ペテロが自分を無にすることができるようになったのには理由があります。ペテロという人は、福音書を読みますとたいへん情に厚く、純粹な人柄であることがわかります。このようなペテロはイエス様を心から尊敬し、愛し、信頼して従って行くのですが、はじめのペテロのイエス様に対する尊敬、愛、信頼というのは、人間ペテロが、人間としてのイ

イエス様に対して寄せる尊敬であり、愛であり、信頼でありました。肉の情によってイエス様を思慕していたのです。それは人間の美しい姿ではありますが、イエス様は、ご自分に対するそのような肉적인思いを嫌われます。そのことの一例として、イエス様が「自分は殺されてよみがえる。」とおっしゃったときに、ペテロはイエス様を引き寄せて「そんなことが起こる筈がありません。」というように諫めたことに対して、イエス様が「おっしゃったかということからもわかります。」

その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならぬことを弟子たちに示し始められた。するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

(マタイの福音書16章21〜23節)

このように、ペテロがイエス様を人間的な愛情によって心配したことに対して、イエス

様は「父なる神様のみこころを行なおうとしているわたしに対して、あなたの人間的な思いは邪魔になる。」と叱られたのです。

この人間的なペテロが徹底的に砕かれたのは、彼がイエス様を否認してしまったときでありました。

彼らはイエスを捕え、引いて行って、大祭司の家に連れて来た。ペテロは、遠く離れてついて行った。彼らは中庭の真中に火をたいて、みなすわり込んだので、ペテロも中に混じって腰をおろした。すると、女中が、火あかりの中にペテロのすわっているのを見つけ、まじまじと見て言った。「この人も、イエスといっしょにいました。」ところが、ペテロはそれを打ち消して、「いいえ、私はあの人を知りません。」と言った。しばらくして、ほかの男が彼を見て、「あなたも、彼らの仲間だ。」と言った。しかしペテロは、「いや、違います。」と言った。それから一時間ほどたつと、また別の男が、「確かにこの人も彼といっしょだった。この人もガリラヤ人だから。」と言いつ張った。しかしペテロは、「あなたの言うことは私にはわかりません。」と言った。それといっしょに、彼がまだ言い終えないうちに、鶏が鳴いた。主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、「きょう、鶏が鳴くまでに、

あなたは、三度わたしを知らないと言う。」と言われた主のおことばを思い出した。彼は、外に出て、激しく泣いた。

(ルカの福音書22章54〜62節)

この箇所は聖書の中でもたいへん劇的なシーンの一つですが、ペテロの心境は私たちには痛いほどわかります。自分があれほど愛していたはずのイエス様を、しかも、イエス様がペテロに「三度わたしを知らないと言う。」とおっしゃったのに対して、「絶対にそんなことはしない。」と強く否定していたにもかかわらず、捕えられたイエス様の目の前で「知らない。」と三度も言ってしまったのであります。そのとき、彼はどんなに自分を意気地なく、ふがいない、惨めな、情ない人間かと責めたことでしょう。そういうペテロの弱さをイエス様はご承知の上で愛してくださっていたのです。イエス様は捕えられる少し前に、ペテロに次のようにおっしゃっています。

シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。

ここに、ご自分の器として用いるために試練をお与えになったペテロに対するイエス様の深い祈りと愛が感じられます。このイエス様の祈りと愛があったからこそ、ペテロは大きな試みの前にイエス様を否んでしまった自分の惨めさの中から立ち上がることができたのです。

ペテロはこの試練によって徹底的に砕かれ、イエス様の前にへりくだる者とされました。イエス様の力が、御霊が十分に働くために、ペテロには、この試練を通して自分の弱さを思い知ることが必要だったのです。そしてこれは、イエス様を信じる私たちにもそのまま当てはまることであります。パウロも次のように言っています。

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

(コリント人への手紙第二12章9節)

パウロだけでなく、ペテロも主はまったく同じように取り扱われたのであります。この

(ルカの福音書22章31～32節)

ようにして、ペテロは砕かれ、その後殉教の死を遂げるまで、主を入れた器として主イエスを証しし続けたのです。ここで主イエス様を信じた私たちはイエス様がペテロと同じことを私たちにも求めておられる、ということを知らなければなりません。

キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。

(コリント人への手紙第二5章15節)

イエス様が復活され、天に昇られてから後、ペテロはまさにこのように生きていたのです。その結果、この生まれつきの足なえが、ペテロという器を通して得たものは、単に肉体の足なえが癒されたことよりもはるかにすばらしいもの、すなわち、まことの神様を知ることができたという喜びでした。そのことは、この男が癒された後でペテロとヨハネとともに神を賛美しつつ神の宮に入ってしまったと記されていることから知ることができます。

イエス様の器としての役割

さて、ペテロはそれでこの事件を終わらせたものではありませんでした。生まれつきの足なえが癒されたことを見て、驚いて彼らの回りに集まって来た多くの人たちに、イエス様について証しをし、罪を悔い改めて神様に立ち返るように勧めたのです。

イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち、私たちの先祖の神は、そのしもべイエスに栄光をお与えになりました。あなたがたは、この方を引き渡し、ピラトが釈放すると決めたのに、その面前でこの方を拒みました。そのうえ、このきよい、正しい方を拒んで、人殺しの男を赦免するように要求し、いのちの君を殺しました。しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です。そして、このイエスの御名が、その御名を信じる信仰のゆえに、あなたがたがいま見ており知っているこの人を強くしたのです。イエスによって与えられる信仰が、この人を皆さんの目の前で完全なからだにしたのです。ですから、兄弟

たち。私は知っています。あなたがたは、自分たちの指導者たちと同様に、無知のためにあのような行ないをしたのです。しかし、神は、すべての預言者たちの口を通して、キリストの受難をあらかじめ語っておられたことを、このように実現されました。そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。

(使徒の働き3章12〜19節)

ペテロは群衆に向かって、イエス様は、神様に逆らい、自分勝手な道を歩む人間の罪を救うために地上に遣わすと、神様が預言者たちの口を通して昔から約束しておられた神の御子であること、その神の御子をあなたがたは無知でしたことは言え十字架につけて殺したこと、しかし、イエス様は死からよみがえられ、罪を悔い改めてご自分を信じる者にご自分のよみがえりのいのちをお与えになること、だから、あなたがたも罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて神に立ち返りなさい、と語りました。これこそペテロが足なえの癒しということを通して、それを見た人々に伝えたかったことでした。

しかし、このようにペテロとヨハネは、足なえを癒し、人々にイエス様の十字架の死と復活について宣傳伝えていた結果、捕えられて民の指導者、長老、学者、大祭司に尋問さ

れることになります。

彼らは使徒たちを真中に立たせて、「あなたがたは何の權威によって、また、だれの名によってこんなことをしたのか。」と尋問しだした。そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。「民の指導者たち、ならびに長老の方々。私たちがきょう取り調べられているのが、病人に行なった良いわざについてであり、その人が何によっていやされたか、ということのためであるなら、皆さんも、またイスラエルのすべての人々も、よく知ってください。この人が直って、あなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのです。『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった。』というのはこの方のことです。この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」

（使徒の働き4章7〜12節）

私たちは、ペテロがここで「救い」という言葉を使っていることに注意したいと思いません。彼は、「私たちが癒されるべき名としては」とは言っていません。「救われるべき名」

と言っています。また「この方以外には、だれによっても癒しはありません。」とは言っていない。「この方以外には、だれによっても救いはありません。」と言っているのです。肉体の癒しは、一つのしるしの現われであって、みこころによっては、癒されないことが神のしるしであることもあります。ですから、神様のみこころがどちらであって、神様は私たちの最善を考えておられるのですから、私たちは感謝してそれを受けるだけあります。肉体が癒されるかどうかよりも、肝心なのは人が罪から救われて、神様に立ち返ることであり、悔い改めて神様に立ち返った者に与えられる永遠のいのちをいただくことであります。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

(ローマ人への手紙 6章23節)

ペテロたちを尋問した人々は、自分たちに対して臆^{おく}することなく堂々とイエス様こそ救い主、キリストであると宣べ伝えているふたりが、律法学者でもない普通の人であることを知って驚きましたが、同時にふたりがイエス様とともにいたことを知りました。

彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるの

を知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。

(使徒の働き4章13節)

そして彼らは、ペテロの力が足なえを癒したのではなく、彼が言ったように、イエス様によって与えられる信仰によって、この足なえに完全なからだが与えられたことを理解することができたのです。

霊的な足なえ

今日の聖書の箇所を味わいながら思うことは、私たちも、かつては生まれつきの足なえだったということです。しかし、それは霊的な足なえ、いのちの道を歩けない足なえでありました。けれども、イエス様を信じる信仰によって、霊の足が癒されて、立って歩くことができるようになりました。そしてイエス様が、

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

(ヨハネの福音書14章6節)

と言われたイエス様ご自身のいのちの道を、この生まれつきの足なえと同じように、神様

を賛美しつつ天国に向かって歩むことができるようになったのです。

そのような私たちに対してイエス様は、今度は私たちの目の前に置かれた多くの生まれつきの霊的な足なえに対して、丈夫なように見えても、なえた肉の足であることも知らずに、その足だけを頼りにこの世の道を歩んでいる人々に対して、ペテロと同じように、「私の持っているいちばん大事な宝物、すなわち、私の中に住んでおられるイエス様を上げましょう。どうかイエス様によって立ち上がり、いのちの道を歩んでください。」と祈りながらイエス様を証しするように、とおっしゃっているのではないでしょうか。私たちは弱くて何もできない者ですが、そのように祈って相手の方と交わるときに、必ずその方に私たちの中のイエス様の御霊が働いてくださり、それまで死んでいたその方の霊の足を立たせてくださるに違いありません。私たちはペテロのように碎かれて、主のしもべとしてイエス様に仕えたいいつも祈るときに、イエス様は必ずその祈りに答えてくださり、私たちを通してご自身のご栄光を現わしてく下さるはずであります。パウロは次のように言っています。

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。

あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

（コリント人への手紙第一 6章19～20節）

このように、かつては生まれつきの霊的な足なえであった自分が、イエス様を信じる信仰によって霊の足で立ち上がることができ、今はイエス様の器として主のご栄光のために生かされているという感謝と喜びを深く覚えながら日々歩むことができたなら、この上ない幸いではないでしょうか。

九 キリストはなぜ昇天されたか

イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」

(使徒の働き1章9～11節)

今日は、このみことばにあるイエス様の昇天の意味について、ごいっしょに考えてみたいと思います。

すべての人間は、生まれながらに神様に対する罪を犯す罪人であり、その罪のゆえに死

なければならなくなりました。その人間を罪から聖めて、死に打ち勝つ永遠のいのちを与えてくださるために、神様の御子イエス様は十字架で死んでくださり、復活してくださいましたのです。したがって、人間の救いのために最も大切なことはイエス様の十字架と復活であるとすることが出来ます。これについてパウロは次のように言っています。

私があなたがたに最もたいせつなことからして伝えたのは、私も受けたことであつて、次のことです。キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、……。

(コリント人への手紙第一15章3〜4節)

しかし、御子イエス様を自分の罪の救い主であると信じた者、すなわち罪から贖い出されてキリストのものとされた者にとって大切なことがもう一つあります。それがこれからごいっしょに考えるキリストの昇天なのです。なぜなら、もしイエス様が昇天なさらなければ、キリスト者の信仰は、希望のない空しいものになってしまうからであります。

キリストの昇天の必要性

イエス様の昇天は、復活と同じく作り話しや、でたらめなことではありません。聖書の確実な証言に基づいた事実であり、私たちキリスト者の信仰の核になっている奇蹟の一つです。イエス様の昇天が事実であることは、冒頭のみことばに「イエスが天に上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。……。」と書かれているように、多くの人々の目の前で起こったことから明らかであります。

しかし、なぜ私たちのために十字架に架かって死んでくださり、三日目に復活されたイエス様は、そのまま私たちのところにとどまることをなさらないで天に昇られたのでしょうか。イエス様が天に昇られるのは何のために必要だったのでしょうか。

一、旧約聖書の預言が成就されるため

イエス様の昇天は、旧約聖書における預言が成就されるために必要でありました。

旧約聖書の詩篇には、キリストの昇天について、次のように預言している箇所があります。

あなたは、いと高き所に上り、捕われた者をとりこにし、人々から、みつぎを受けられました。頑迷な者どもからさえも。神であられる主が、そこに住まわれるために。

パウロはこの中の「あなたは、いと高き所に上り」という言葉が、天の御国の神様の御座に上られたイエス・キリストを指しているというように、この詩篇の箇所をエペソ人への手紙の中で説き明かしています。

そこで、こう言われています。「高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れ、人々に賜物を分け与えられた。」——この「上られた。」ということばは、彼がまず地の低い所に下られた、ということではなくて何でしょう。この下られた方自身が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方なのです。——。

(エペソ人への手紙4章8〜10節)

すなわち、神様の御子イエス様は肉のからだをとってこの地上に來られ、十字架の死による罪の贖いのみわざと、死に打ち勝つよみがえりのみわざを成し遂げられた後、ご自身

のご臨在と永遠のいのちの賜物によって、すべてのものを満たすために、ふたたび天にある神様の御座に凱旋^{がいせん}なさった、ということでもあります。このように神様は旧約時代に、すでに詩篇の作者を通して、神様の御子が天から人間を救うために降りてこられ、そのみわざを終えられてふたたび天に戻られるということを預言しておられたのです。そしてその預言は神様の御子イエス・キリストによって成就されたのです。

イエス様ご自身も、捕えられる前にパリサイ人たちに、ご自分がやがて父なる神様のもとに行くことについて、次のようにおっしゃいました。

まだしばらくの間、わたしはあなたがたといっしょにいて、それから、わたしを遣わした方のもとに行きます。あなたがたはわたしを捜すが、見つからないでしょう。また、わたしがいる所に、あなたがたは来ることができません。

(ヨハネの福音書7章33〜34節)

また復活されたイエス様も、墓の所でイエス様の亡骸が失われていたのを見て悲しんでいたマリヤに、ご自分が天に上げられることを次のように告げられました。

イエスは彼女に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、それを園の管理人だと思って言った。「あなたが、あの方を運んだのでし

たら、どこに置いたのか言ってください。そうすれば私が引き取ります。」イエスは彼女に言われた。「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で、「ラボニ（すなわち、先生）。」とイエスに言った。イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。」

（ヨハネの福音書20章15〜17節）

二、キリスト者に聖霊が与えられるため

イエス様の昇天は、イエス様に代わってキリスト者に助け主である聖霊が与えられるために必要でありました。

イエス様は弟子たちに、ご自分が昇天することによって助け主なる聖霊が遣わされるから、ご自分の昇天は弟子たちにとって益であるとおっしゃいました。

今わたしは、わたしを遣わした方のもとに行こうとしています。しかし、あなたがたのうちには、ひとりとして、どこに行くのですかと尋ねる者がありません。か

えって、わたしがこれらのことをあなたがたに話したために、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになっています。しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします。

(ヨハネの福音書16章5〜7節)

イエス様は約束通り天に上られた後、イエス様を信じる人々に聖霊を遣わされました。このときの有様を聖書は次のように記しています。

五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しだした。

(使徒の働き2章1〜4節)

ペテロはこれについて、

神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがた

が見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。

(使徒の働き2章33節)

と証言しています。このような形で聖霊が注がれたのは、このとき限りですが、イエス様はそれから今に至るまで、信じる者に聖霊をお与えになっておられるのです。

わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにいらっしゃるからです。

(ヨハネの福音書14章16〜17節)

助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

(ヨハネの福音書14章26節)

私たちキリスト者は、この助け主である聖霊に支えられ、助けられ、導かれてはじめてイエス様を知り、イエス様に従う信仰の歩みが可能になるのです。後で申しますが、イエス様は地上におけるご自分の使命を終えられてから、今度は天において仕事をなさるのであります。そこで、ご自分が地上でお救いになった者の助け主として、ご自分の代わりに聖霊をお遣わしくださったのです。

三、仲介者としてキリスト者を取りなすため

イエス様の昇天は、仲介者として地上に置かれているキリスト者を取りなしてください。ためにも必要でありました。

イエス様は天で神の右の座に着かれ、まだ肉の衣を着ているために、罪の誘惑に弱い、罪を犯しがちな私たちキリスト者のためにいつもとりなしてくださるのです。

罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていただくのです。

(ローマ人への手紙 8 章 34 節)

キリストは永遠に存在されるのであって、変わることはない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができます。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

(ヘブル人への手紙7章24〜25節)

四、キリスト者のために天に住まいを備えるため

イエス様の昇天は、キリスト者のために天に住まうべき家を備えてくださるためにも必要でありました。

イエス様は十字架に架かられる前に、天に上られる目的を弟子たちに次のように言われました。

わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

私たちキリスト者が希望と喜びを持って肉体の死を迎えることができるのは、このイエスの約束のみことばを確信しているからであります。これについて、パウロも次のように言っています。

私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。

(コリント人への手紙第二5章1〜3節)

五、キリスト者に神の国の相続の約束を保証するため

イエス様の昇天は、神の国の相続を約束された神様が私たちキリスト者にご自分の約束が変わらぬことを保証なさるために必要でありました。

聖書に次のような箇所があります。

神は約束の相続者たちに、ご計画の変わらないことをさらにはっきり示そうと思

い、誓いをもって保証されたのです。それは、変えることのできない二つの事によって、——神は、これらの事がらのゆえに、偽ることができません。——前に置かれている望みを捕らえるためにのがれて来た私たちが、力強い励ましを受けするためです。この望みは、私たちのたましいのために、安全で確かな錨の役を果たし、またこの望みは幕の内側にはいるのです。イエスは私たちの先駆けとしてそこにはいり、永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司となりました。

(ヘブル人への手紙6章17〜20節)

このみことばにある「二つの事がら」とは、

神は、アブラハムに約束されるとき、ご自分よりすぐれたものをさして誓うことがありえないため、ご自分をさして誓い、こう言われました。「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたを大いにふやす。」

(ヘブル人への手紙6章13〜14節)

の箇所にある、神様のアブラハムへの約束と、それを保証する誓いのことです。また、「幕の内側」とは、天の聖所、すなわち神様の御座のある所です。イエス様は、私たちキリスト者が神様のお側近くに行くことができるという神様の約束の誓いの保証として、私

たちの先駆けとなって天に昇られたことにより、私たちもそこに入れるという確かな希望を与えてくださったのです。

六、キリスト者に空中携挙のときの型を示すため

イエス様の昇天は、キリスト者が携え^{たずさ}挙げられるときの型を示してくださるために必要でありました。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによりみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

(テサロニケ人への手紙第一 4章16〜17節)

私たちキリスト者は、イエス様のご再臨のときに、イエス様が私たちのからだをご自分と同じ朽ちない、聖いからだに変えてくださることを知っています。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておい

でになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

(ピリピ人への手紙3章20～21節)

しかし、そのとき、そのようなからだに変えられたキリスト者が、どのようにして天に昇って行くのか私たちには想像もできません。そこでイエス様は、私たちに「あなたがたもこのように天に引き上げられるですよ。」ということを私たちに見える形で示してくださったのであります。

七、贖罪のわざが完了したことを示すため

イエス様の昇天は、イエス様が十字架の血による永遠の贖いの御わざを成し遂げられたことを示すために必要でありました。

キリストは、すでに成就したすばらしい事からの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えれば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、

ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。

(ヘブル人への手紙9章11〜12節)

イエス様は、元来神様の御子として、天の聖所で神様の右に座しておられる方です。したがって、父なる神様から人間の罪を救済するために地上に遣わされた御子イエス様が、その使命を達成されれば、ふたたび天に戻られ、神様の右に座られるのは当然のことです。イエス様は天に昇られることによって、父なる神様からご自分に与えられた使命を完全に成就なさったことを示されたのです。

キリストの昇天が復活後四十日も経ってからなされた理由

次に、イエス様の昇天が、復活後直ちにではなく、しばらく経ってからだった理由は何であったのかを考えてみたいと思います。

イエスは苦しみを受けた後、四十日の間、彼らに現われて、神の国のことを語り、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。

(使徒の働き1章3節)

もし、イエス様が復活直後に昇天なさったならば、イエス様の復活は作り話か、だれか

が仕組んだものと言われても仕方がないでしょう。イエス様は、ご自身の復活が疑う余地のない確かな事実であることを立証なさるために十分な時間をおかけになったのであります。イエス様は、復活後四十日の間、多くの機会に、弟子たちをはじめ、数多くの人にご自身を現わしてくださり、聖書の真理の確かなことをお示しになり、反対者の口を封じられたのです。

イエス様の復活後、ふたりの弟子がエルサレムから十一キロメートル余り離れたエマオという村に向かっていました。道すがら彼らが十字架に架けられ、墓に葬られたイエス様の亡骸が墓から消えた出来事を話し合っているとき、復活されたイエス様が現われ、ふたりにご自分について書かれている聖書の事がらを説明されたと、聖書に書かれています。

イエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。

また、エルサレムで使徒たちとその仲間が集まってイエス様の復活について話し合っている所にも、イエス様が復活された姿を現わされて、彼らを信じさせるために食べ物を召し上がってから、次のようにおっしゃっています。

さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらのことの証人です。」

このように、復活なさったイエス様が昇天の前にしばらくの間地上にとどまられた理由は、数多くの機会に、数多くの人々にご自分を現わされて、復活が確かな事実であることの確信をお与えになるため、また弟子たちにご自分について語っている聖書の真理を十分

に説き明かしてくださるためでありました。弟子たちは復活のイエス様にお会いして、イエス様に霊の目を開いていただき、聖書の真理を親しく教えていただいたことによって、自分たちがイエス様の証人であるという自覚が与えられ、世界中に力強く福音を宣べ伝え始めることができたのであります。

以上のように、私たちの主イエス様は父なる神様から与えられた地上でのご自分の任務を完了されて天に昇られました。それは天国で休息なさるためなのではありませんでした。主イエス様は私たちキリスト者の住まいを備えてくださるため、私たちキリスト者に天国への確かな希望を与えてくださるため、御霊なる助け主を遣わしてくださるため、神様の右の御座で私たちの大祭司、また仲介者として地上に置かれている私たちキリスト者のためにとりなしの働きをしてくださるために、昇天されたのであります。私たちは、私たちのためにこのような深いご配慮によって、天国まで導いてくださる父なる神様、御子なるイエス様にただ、ただ、心からの感謝を捧げるばかりではないでしょうか。

十 「それがあなたと何のかかわりがありますか」

「まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かった時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたい所を歩きました。しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。」これは、ペテロがどのような死に方をして、神の栄光を現わすかを示して、言われたことであった。こうお話になってから、ペテロに言われた。「わたしに従いなさい。」ペテロは振り向いて、イエスが愛された弟子があとについて来るのを見た。この弟子はあの晩餐のとき、イエスの右側にいて、「主よ。あなたを裏切る者はだれですか。」と言った者である。ペテロは彼を見て、イエスに言った。「主よ。この人はどうですか。」イエスはペテロに言われた。「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありま

すか。あなたは、わたしに従いなさい。」

(ヨハネの福音書21章18〜22節)

今日は、イエス様がペテロにおっしゃったこのみことから、神様やイエス様が私たちの生き方については、ひとりひとり、ほかの人と異なるご計画を立てて導いてくださっているということについて、ごいっしょに考えたいと思います。

ペテロに対する主イエスのご計画

復活なさったイエス様は、弟子たちに二度ご自身を現わされましたが、三度目には朝早くテベリヤという湖の湖畔で漁をしていた弟子たちに姿を現わされ、弟子たちと朝の食事をともになさいました。そのとき、ペテロに「あなたはわたしを愛しますか。」とお聞きになり、彼が「はい、主よ。私があなたを愛することは、あなたがご存じです。」と答えると、イエス様は「わたしの羊を飼いなさい。」とおっしゃいました。この質問と応答が三度繰り返された後、引き続いてイエス様がペテロに言われたことばが冒頭のみことばです。

イエス様はガリラヤ地方を中心として多くの場所で多くの人々に、ご自分が神の子とし

て父なる神様から人間の罪を赦すために遣わされたことを、みことばと、みわざによって示され、また神様の律法を正しく守っていると自負していた律法学者やパリサイ人や祭司に對しては、偽善者と厳しく非難されました。その結果、イエス様を憎む祭司長たちに捕えられます。そして捕えられる直前に、イエス様はペテロに「あなたはわたしを三度知らないと言う。」と言われていたのです。ペテロは「そのようなことは決して言いません。」と誓ったのにもかかわらず、イエス様がおっしゃった通りに、イエス様を三度知らないと否定してしまったことを心から悲しんでいました。ですから、復活されたイエス様から「わたしを愛しているなら、わたしの羊、すなわちイエス様を信じる者の群れを守り、導きなさい。」という重大な使命を与えられたことが、どんなに嬉しかったことでしょうか。

しかし、その直後にイエス様から、ペテロがそのために投獄され、殉教の死を遂げなければならぬことを示唆^{しき}するお言葉を聞いたとき、ペテロの受けたショックはたいへんなものだったと思います。彼はそのとき、どういう行動を取ったでしょうか。

ペテロは振り向いて、イエスが愛された弟子があとについて来るのを見た。この弟子はあの晩餐のとき、イエスの右側にいて、「主よ。あなたを裏切る者はだれで

すか。」と言った者である。ペテロは彼を見て、イエスに言った。「主よ。この人はどうですか。」

(ヨハネの福音書21章20～21節)

と聞いたのです。イエスの愛された弟子とはヨハネのことです。彼は自分が苦難の道を歩むことになるという自分の将来をイエス様に予告されたときにまず頭に浮かんだのは、ではこのヨハネはどうなのだろうか、ヨハネは自分と違って迫害されて苦しまなくて済むのだろうか、あるいはヨハネもまた縛られて行きたくない所に連れて行かれるのだろうかという、自分と他人との比較でした。

ペテロはイエス様からイエス様を信じた人々を指導するという、重要な働きのためにさまざまな信仰の訓練を受けていました。そのことは、たとえばルカの福音書の中に記されているペテロに対してイエス様がおっしゃったことばかりも推察できます。イエス様は次のようにおっしゃいました。

シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たち

を力づけてやりなさい。

(ルカの福音書 22章 31〜32節)

このようにイエス様は、どのようなことがあってもペテロのために祈ってくださるという、この上もない約束をしてくださり、ペテロの使命も明らかにしてくださっているのですから、ペテロがイエス様を心から愛し、信頼していれば、イエス様のみに従うに当たって他の弟子が受けるかもしれない試練と、自分の受けるべき試練を比べる必要はまったくなかったのです。

ペテロの思惑に対する主の答え

元来ペテロは他人と自分を比較する性質が強かったようです。たとえば、イエス様が金持ちの青年との対話をなさった後の彼の発言からもそれがうかがわれます。

イエスは、彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていた

からである。それから、イエスは弟子たちに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国にはいるのはむずかしいことです。まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。

「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは、人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」そのとき、ペテロはイエスに答えて言った。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるでしょうか。」

(マタイの福音書19章21〜27節)

ペテロは、自分の財産を捨てる決心をすることができないでイエス様のもとを去って行った金持ちの青年と比べて、自分たちは家族も仕事も何もかも捨ててイエス様に従って来たという一種の優越感を覚えながら、「ご覧ください。私たちは何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるでしょうか。」とイエス様に聞きました。ペテロは終わりの日には、熱心な信仰を持つ者がまず報われることを期待していました。

ペテロの質問にお答えになったイエス様のみことばからもわかるように、その期待は間違っていない。

イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」

(マタイの福音書19章28～29節)

しかし、この後にイエス様は次のみことばを付け加えられたのです。

ただ、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。

(マタイの福音書19章30節)

ぶどう園のたとえに見る主のみこころ

イエス様はここで確かに主のために犠牲を払って従った者には、天の御国でその報いを豊かに与えられることを約束なさっています。しかし同時に、その報いを与える順番につ

いては主がお決めになるということもおっしゃっているのです。どうしてでしょうか。ここで問題となるのは犠牲を払う動機です。ペテロは何かをいただけるといふ動機で、一切のものを捨てたように思われる発言をしました。それに対してイエス様はご自分の名のために犠牲を払う者、すなわちイエス様を愛するがゆえに犠牲を払う者はその幾倍の報いを受け、更に永遠のいのちというすばらしい報いを受けるとおっしゃったのです。このようにイエス様はご自分に従って来る者の心の動機を問題にされるのです。更にイエス様はさきほどのみことばに続いて次のようなたとえを話されました。

天の御国は、自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人のようなものです。彼は、労務者たちと一日一デナリの約束ができると、彼らをぶどう園にやった。それから、九時ごろに出かけてみると、別の人たちが市場に立っており、何もしないでいた。そこで、彼はその人たちに言った。「あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。」彼らは出て行った。それからまた、十二時ごろと三時ごろに出かけて行って、同じようにした。また、五時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。「なぜ、一日中仕事もしないでここにいますのですか。」彼らは言った。「だれも雇ってくれないからです。」彼

は言った。「あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。」こうして、夕方になったので、ぶどう園の主人は、監督に言った。「労務者たちを呼んで、最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちにまで、賃金を払ってやりなさい。」そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつもらった。最初の者たちがもらいに来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らもやはりひとり一デナリずつであった。そこで、彼らはそれを受け取ると、主人に文句をつけて、言った。「この最後の連中は一時間しか働かなかつたのに、あなたは私たちと同じにしました。私たちは一日中、労苦と焼けるような暑さを辛抱したのです。」しかし、彼はそのひとりに答えて言った。「私はあなたに何も不当なことはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。自分の分を取って帰りなさい。ただ私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいのです。自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法がありますか。それとも、私は氣前がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか。」このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。

(マタイの福音書20章1〜16節)

朝から雇われて働いた者が、夕方から雇われて働いた者と同じ賃金をもらうことは常識から言っても不公平ではないかと、朝から働いた者に同情する思いは私たちにもあるのではないだろうか。しかし、この主人ははっきりと二つのことを言っています。一つは「私はあなたと一デナリの約束をして、それを払ったのだから、あなたに対して不当な扱いはいしていいない。」ということ、もう一つは「自分のものを自分が見たいようにするのは当然ではないか。」ということでした。この主人の賃金支払いに対する考えでは、賃金は働いた時間に比例して支払うものではなく、与えられた仕事を感謝して忠実に働く報酬として支払うというものでした。

このたとえによって、主権者である神の子イエス様はペテロに、ご自分の弟子の扱い方については、だれからも命令はお受けにならないこと、また、たとえ人の目には、ある者が他の者よりも寛大に、あるいは親切に扱われるように見えても、ご自分のお考え、ご自分の基準に基づいてなさることは、決して不公平ではないことなどをお示しになったのでした。

そして、このことはペテロだけではなく、イエス様を信じた私たち主のしもべにも適用されるものであることを覚えておく必要があります。

自分に対する主のお取扱いに不満を覚えたら

十四年前に、私の愛するひとり娘を天に召されるといふ辛い試練を与えられたときに、私は、主は他の兄弟、姉妹にはこのような試練をお与えにならないのに、なぜ自分だけにこのような辛い試練をお与えになるのだろうか、ペテロと同じように自分と他人とを比較してしまい、主イエス様に訴えたことがありました。そのときに与えられたのが、「それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」というみことばでした。

もしイエス様が他人に寛大で、自分に与えられないものを彼にお与えになるように見えるとしたら、またイエス様が自分の心に悲嘆と苦しみを生じるような境遇をお与えになり、いっぽう他人には物事がすべてうまく運ぶような境遇をお与えになるように見えたなら、私たちはどのように対処したらよいのでしょうか。このためには次のみことばが与えられています。

今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせで見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完

全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。

(コリント人への手紙第一13章12節)

ここでパウロが言っているように、私たちはイエス様を信じてからも、なおイエス様のみこころを完全に理解することはできません。なぜなら私たちが肉の衣を着て地上に置かれている限り、私たちの信仰によってはイエス様のみこころのほんの一部しか知り得ないからです。天の御国に移されるまでは、私たちはぼんやりしか映らない昔の鏡で物を見るように、いくら霊の目をこらして見ても、みこころのほんの一部分しか知ることができない者であることをわきまえるべきであります。それがわかったとき、私たちは他人に対する主のお取り扱いを気にしないで、「それがあなたと何のかかわりがありますか。あなたはわたしに従いなさい。」とおっしゃったイエス様のみことばだけに信頼して、イエス様から目を離さず、イエス様の肩越しに人を見ないようにすることができるようになります。

私たちは主にあるほかの兄弟あるいは姉妹のほうがイエス様から優遇されているように思っているでしょうか。私たちは主にあるほかの兄弟、姉妹が、自分よりすぐれた生まれつきの賜物や、魅力的な性質を持っていることをうらやましいと思っているでしょうか。

私たちは自分は誤解されている、あるいは主のために働く自分の働きは正しく評価されていないと思っているでしょうか。私たちは主にあるほかの兄弟、姉妹よりも大きな試練を受けていると思っているでしょうか。もし、私たちがそのような問題で思い悩んでいるならばイエス様にお聞きしましょう。イエス様はペテロにおっしゃったように、「それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたはわたしに従いなさい。」とおっしゃるに違いありません。

私たちはイエス様が主にあるほかの兄弟、姉妹をどのように自分とは異なるお取り扱いをなさるかについて気にする必要はまったくありません。そうでなく、私たちはイエス様がご自分のご計画に基づいて、自分を愛してくださっている同じ愛の御手で、その兄弟、姉妹を主のしもべとして導いておられると思うべきであります。

自分の関心を主とお会いすることに向ける

私たちは自分の関心を、主にある兄弟、姉妹を主がどのように取り扱われるかに向けるのではなく、自分に対する主のお取り扱いに感謝しつつ、主に自分をゆだねて、やがてイエス様が私たちを迎えに来てくださる日には、顔と顔を合わせてみこころを完全に知ること

ができると、その日の来るのを待ち望むことにだけ向けながら、日々過ごすべきではないでしょうか。最後にヤコブの手紙の中からみことばをお読みして終わりたいと思います。

こういうわけですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、秋の雨や春の雨が降るまで、耐え忍んで待っています。あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです。兄弟たち。互いにつぶやき合ってはいけません。さばかれないためです。見なさい。さばきの主が、戸口のところに立っておられます。苦難と忍耐については、兄弟たち、主の御名によって語った預言者たちを模範にしなさい。見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いであると、私たちは考えます。あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いています。また、主が彼になさったことの結末を見たのです。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということです。

(ヤコブの手紙5章7～11節)

あとがき

私は聖書の知識にも乏しく、信仰も未熟な一信徒に過ぎません。その私が聖書のみことばを取り次がせていただくようになったのは、イエス様が閉ざされていた私の霊の目を開いて私に出会ってください、イエス様の小さなしもべとして福音を宣べ伝えるようにと仰せになったからです。私は子どもの頃は日曜学校に行き、また学生時代には洗礼も受けておりましたので、イエス様のことは耳で聞いていたのにもかかわらず、そのときはイエス様に出会ってはいませんでした。ですから、罪の意味も恐ろしさもわからず、したがって神の御子イエス・キリストの十字架の死の苦しみが自分のためであるとは考えることもありませんでした。私は悔い改めのない、まったく名ばかりのクリスチャンだったのです。けれども、そのような私をイエス様は一方的に愛してください、自分を愛することしか知らなかった私のかたくなな心を砕いてください、閉ざされた私の霊の目を開いて私の罪を明らかにしてくださいました。そして、その私の罪を贖うために十字架の上で死んでください、また私に永遠のいのちを与えるために、よみがえってください。イエス様ご自身

と出会わせてくださったのです。それは約二十年前のことでした。ヨブはヨブ記の中で、

私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

(ヨブ記42章5～6節)

と言っていますが、これはそのまま私自身にも当てはまることであります。イエス様を霊の目で見た者は、イエス様との人格的な交わりに入れられます。そしてイエス様との人格的交わりを通して、イエス様を愛し、自分の生涯の主としてイエス様に従うことこそほんとうの喜びであることを知ります。私がメッセージを通してイエス様を証しするのも、まだイエス様をご存じない方々に、そしてまた、イエス様をより良く知りたいと思っておられる方々に、そのようなイエス様との出会いを通して、イエス様とともにあるほんとうの喜び、すばらしさを少しでもご紹介することができたら、と切望するからにほかなりません。その動機で始めた我が家の家庭集会も、今年で十九年になりますが、毎回イエス様が導き、支えてくださって、いつも喜びで満たしてくださいます。

この本に収められた十のメッセージは、家庭集会や各地のキリスト集会で行なった福音

メッセージの中から選んだものです。お読みになって、聖書の同じ箇所が何度か出てきたり、同じような説明が何度か繰り返されていることに気づかれると思います。しかし、このような箇所は、神様が私たちに語ってくださっている重要なメッセージですから、どうかそのことに心を留めていただきたいと思います。

この本をお読みになったお一人おひとりが神様の愛と恵みそのものであるイエス・キリストに出会われて、イエス様の救いのみわざをご自分のものとしてお受入れになりますように、また、イエス様に従う、まことの平安と喜びと希望に満ちた人生を歩まれますように切にお祈りいたします。

ここに版を重ねるにあたり、すべてを導いてくださった、私たちの造り主である神様のご栄光だけが現されますように心から祈りつつあとがきの言葉とさせていただきます。最後に、主にあつて表紙のデザイン制作の労をとってくださいましたテキストイル・デザインー藤村倫子姉に心から感謝いたします。

二〇〇二年六月

重田定義

■著者略歴■

重田 定義

1927年東京で生まれる

1950年慶応義塾大学医学専門部卒業

1967年慶応義塾大学助教授（医学部・衛生学公衆衛生学）

1974年東海大学教授（医学部・衛生学）

現在東海大学名誉教授 医学博士

著書

『私たちの国籍は天にあります』（やさしい聖書の福音メッセージ集）

『医者に治せない病気』

『みことばは食べるもの』（福音メッセージ集）

『仮の住まいと永遠の住まい』（福音メッセージ集）

『新しい天地と古い天地』（福音メッセージ集）

『何を求めて生きるか』（福音メッセージ集）

本文中の聖句は、日本聖書刊行会「新改訳
聖書」から引用しています。

私たちはキリストに会った 定価300円（本体286円＋税）

1997年6月5日 初版発行

2002年7月20日 第4刷

著 者 重 田 定 義

発 行 者 重 田 定 義

〒167-0033 東京都杉並区清水2-8-12

印刷・製本 新 生 宣 教 団

定価 300円（本体 286円＋税）